TURN LAND プログラム

2024

活動記録

本書は福祉事業所・施設や社会的支援を行う団体が
アーティストとともにアートプロジェクトを企画し、
実践する「TURN LANDプログラム」の
2024年度の活動についてまとめたものである。
事業についての説明の後に、
10のプロジェクトの活動紹介と
TURN LANDミーティングの様子を記した。

目次

はじめに 004–005

TURN LANDプログラムについて 006–016
事業内容／プロジェクトの運営について／FAQ

プロジェクトレポート10の取組

TURN LAND

だんだん 018–025
ラ・マノ 026–033
西荻ふれあいの家 034–043
はぁとぴあ原宿 044–053
さくらんぼ 054–061
フェイト 062–069

プレ LAND

浅草みらいど 070–077
東京東浅草の家 078–085
翔和学園 086–093
はなまるホーム浅草北 094–101

TURN LANDミーティング

第1回 TURN LANDミーティング 104–105
第2回 TURN LANDミーティング 106–107
第3回 TURN LANDミーティング 108–109

あとがき 111

重ねられた交流の賜物
アーティストと本当に出会う

森 司（アーツカウンシル東京 事業調整課長）

福祉とアートが本気で協働するためには、いささかの経験がもとめられる。本取組が、アートを届けることではなく、包括的支援事業においてアート（芸術文化）が担える役割を双方が理解し、その大きな可能性を発展させていくことにあるからだ。2024年度のTURN LANDプログラムは、そのタスクの実現に向けて大きく歩みを進めることができた。

TURN LANDプログラムを運営する事務局、実施主体となる福祉施設、そしてプログラムに参画するアーティスト、その3者が互いの担いどころを理解し、良好な関係性の中で事業展開ができた年になった。参画する施設がハブとなり、さらに近隣の施設に働きかけ協働することで、活動の現場や関与するステークホルダーも格段に増えた。経験の積み重ねの重要さ、事業継続の大切さをあらためて知る思いだ。

その一助に、活動を記録し可視化した冊子と、体験を言葉にする機会となった映像の制作がある。

映像には手話と音声ガイドも用意されている。これら制作物により、一過性の事柄ではなく価値化された記憶として蓄積され、取組が新規参画施設や後任担当者含め広く継承されるものとなった。事業説明の場においても活用され、秋に東京国際フォーラムで東京都が主催した「だれもが文化でつながる国際会議2024」で、事務局が本取組について紹介する際にも活用された。

この国際会議の会場には、高齢者在宅サービスセンター西荻ふれあいの家で、アーティスト伊勢克也が利用者と編み物を通じて交流した時間の証しともいえる作品も展示された。そして、ささやかな交流イベントには百歳となる利用者も会場を訪れ、作家や職員、施設のメンバーと和やかな時間を過ごしていかれた。短いながらも濃密で幸せなひと時は、単発のイベントとは異なる、日々の営みに近い継続的なアート活動がもたらす世界として目の当たりにされた。

伊勢が主導する「編み物」はちょっと変わっていて、服やマフラーといった明確な用途のある類のものではない。人型のボディそのものを筒状に編み上げていく、毛糸によるトルソー彫刻作品と書いて通じるだろうか。伊勢は一足飛びに「編み物」に辿り着いたわけではない。

伊勢は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の文化プログラムとして実施された本事業の前身となる「TURN」から、西荻ふれあいの家（当時は「桃三ふれあいの家」）と交流を続けてきている。現代美術作家として、どのような活動がTURNにおける活動のあり方として正解となるのか、求められているものかを、通い詰め交流を深めることを通じて模索する時期を過ごしてきた。アーティストにも施設にも転機になったのが、施設内で流行っていた「絵手紙」の活動を膨らませた、2019年開催の東京都美術館での「TURNフェス5」であり、2021年の「TURNフェス6」での展示であった。施設においてもTURNフェスへの参加を社会参加の機会として歓迎するところがあり、一昨年のTURN LANDミーティングの場において発表の機会を待望する要請もあった。そのようななかで今回発表ができたのは、作家の造形世界を高齢の御婦人たちが共に編み物で具現化する活動へと変貌させ、楽しみと共に受け入れているからだ。積み重ねられた交流の賜物だ。

アーティストの慰問的な造形教室との違いがそこにはあり、アーティストの本気の造形活動に巻き込まれることの醍醐味は、アートに触れる喜びを超え、創造の時間を共有できることにある。ちょっとした編み間違いも表現として容認され、歓迎される世界を内包するアートの自由さ、大らかさ、豊かさがある。

ここに至るまでの間、関与するアートの側も施設の側も、TURN LANDにおける「アート」の活動イメージをどこか更新しきれていないもどかしさがあった。伊勢が示した活動のあり方は、一つの啓示ともいえるものだ。信頼関係を築き、状況が醸成されるまで、急ぐことなく時を過ごすことの重要性を共有しておきたい。施設において流れる時間が、旺盛な活動を強いられる社会とは違う、多様な速さの時間の流れであり、一様ではないからだ。

伊勢が通う現場、施設に限らず、2022年から展開してきた本事業の各現場において、アーティストによるすこし尖った表現活動の提案にも肯定的な反応がみられるようになったと思う。そのような現場の変化を嗅ぎ取った事務局が、アーティスト自身の活動について、関与するメンバーがより深く知る機会としてTURN LANDミーティングを実施したことも大きな要因となっている。アーティストがTURN LANDの活動に介在する必要性の意味を知り、これまでとは違った向き合い方でアーティストを受け入れられる下地ができたと思われる。

アーティストと出会い、彼らの思考を知る。そのことによって現場で提案されたプログラムを実施するのではなく、活動をどのように主体的に導いていくべきか、そのために協働するパートナーとしてアーティストを見られるようになる。おっかなびっくりだったアーティストとの関わり方の変化は、双方が担う役割の違いを超えた協働に役立つ。

2024年度TURN LANDミーティングの1回目の主題は、伊勢が自身の主題となる「マカロニ」と名付け呼ぶ世界観。その着想を得た経緯とその日以来「マカロニ」を表現として追い求めている自身の人生を作家のありようとして熱く語るのを聞き、2回目は、きむらとしろうじんじんが、自身の表現活動である「野点」と参画する活動「作業場」について、何に注力しているのか、どこに価値と意味を見出しているかなど、アーティストのこだわり方を詳細に聞く会として開催された。

すでに現場では施設側が「分かる」範疇でのアート活動から「分からない」範疇へ展開しつつあった。そこはアーティストにとっても本格的な活動領域だからこそ、アート活動固有の面白さが漂いだす。座学的にアーティストの話を聞く経験は、そのようなあり方の意味を理解するきっかけとなったと思う。面倒なことや難しいことをしたいのではなく、かくあるべしとされる暗黙知から少しだけはみ出し、問い直す活動であり、余白を呼び込むアート活動となる。その塩梅の引き取り加減がアート活動を運営していくための勘所だろうか。同時にTURN LANDプログラムを実施する意義ともなる。

アートの力を熟知する人たちがそれぞれの現場に出向き、状況と出会い、施設のメンバーと共に活動を共創する。そのようなインクルーシブなプロセスを経た構想は、借り物ではないオリジナルの活動ならではの良さを持つ。そしてオリジナルでユニークな活動であるからこそ、アーティストの力を借りる必要があるという原点に還ってくる。余白をもたらす活動を定着させることができれば、過ごし方のデザインが豊かな魅力的な場となる。そのような現場を目視し経験すれば、アートを難しく思う気持ちは霧散し、楽しく豊かであるために、アート（芸術文化活動）を必要なものとする認識が形成されることだろう。そのためには、しばらくの間活動し試行錯誤する経験をしながら、準備の手間がいつしか厄介なことではなく、そのプロセスさえ楽しみとなるまで持つのがむしろ近道だと思う。TURN LANDプログラムでは、そのような経験を持ちたい施設と伴走することで事務局もアーティストも経験を積み、展開するプログラムの更新をはかってもいる。それぞれの立場においていわばオン・ザ・ジョブ・トレーニングであり、お互いを鏡にしながら環境を整えていく事業だ。アニュアルレポートである本活動記録は、各施設での活動を俯瞰して振り返るものであり、次に向けた検証のための資料でもある。

TURN LAND プログラム
について

TURN LAND プログラムは
福祉施設などを拠点に
アートプロジェクトを行う文化事業です。

施設の職員と利用者、アーティスト、地域の人々などが集い、
共にアートプロジェクトを企画運営することで、
異なる習慣／視野／価値観をもった人々が
「違い」を受け止め合いながら「共に居られる状況」をつくりだす。
そして、そこで育まれたアイデアや知見を
そこに立ち会えなかった人々と共有し、
私たちの前にあるさまざまな「壁」を創造的に乗り越えていく
前向きなエネルギーを社会に発信しています。

事 業 内 容

プログラム実践

TURN LAND
（継続を視野に運営体制づくり）

プレ LAND
（まずは体験！）

×

ネットワーク醸成

TURN LAND ミーティング
（関係者が集う学び合いの場）

1 年 の 流 れ

6 月〜12 月

① 顔合わせ（1〜2 回）
② 企画構想（1〜2 回）
③ テスト実施（1〜3 回）
④ 本番実施（1〜2 回）
⑤ 振り返り（1〜2 回）

1 月〜3 月

⑥ 記録動画や
記録冊子づくり

開 催 時 期

2024 年度は
8 月、10 月、1 月
に開催

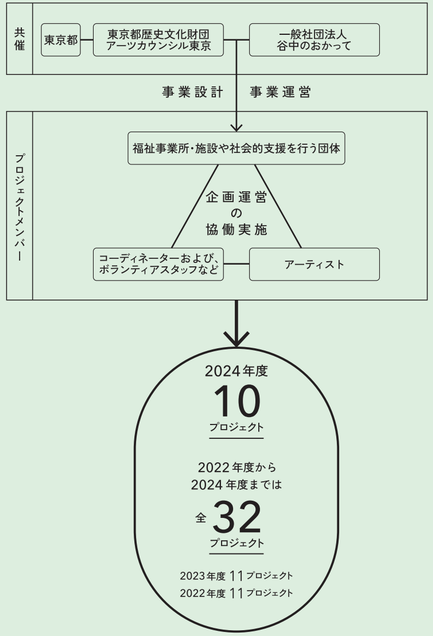
試行的な実施から始められ、
相談しながら進められる。

本事業は、福祉施設にアーティストを招き、その施設の職員や利用者、地域の人々とアートプロジェクトを計画し協働する、「プログラム実践」を軸に展開します。多くの福祉職員にとってアートプロジェクトは未知の領域であり、同じように多くのアーティストは福祉施設でのプロジェクトを経験していません。そこで、本格実施を見据えてお試し体験ができる「プレ LAND」と、その経験を踏まえ運営体制を整えながら数年間の実施を目処に展開する「TURN LAND」の2つの段階を用意しています。また、それらと並行してこの事業に参画する施設職員やアーティストなどが集い学び合う「TURN LAND ミーティング」を実施しています。

「共創」を実現するためのプロセスを重視。

参画施設の利用者を対象にしたアートプログラムを実施するのではなく、利用者を含めた施設に出入りする人々とアーティストがプロジェクトを共創することが目的のため、まずは福祉職員とアーティストが出会うところから始まります。アーティストは施設見学を繰り返したり、利用者と施設で過ごしたり、職員に自己紹介を兼ねてワークショップをしたりします。そうした交流を通じて、利用者の特性やその施設及び地域の特性に触れていきます。
この事業では、アーティストたちが普段と違った場所での交流を通じて協働することで、利用者を含むさまざまな人が関わることのできる企画が生まれることを期待しています。アーティストが施設に繰り返し通うことや、利用者たちと無為の時間を過ごすこと、さらに、テスト実施を繰り返しながら多様な人々が関われるプログラムに更新していく、そのプロセスこそがこのプロジェクトの醍醐味です。

運営体制



2024年度は都内で10プロジェクト、17の福祉施設*が参加協力しています。

参画する福祉施設の規模や立地状況がさまざまなので、施設の特徴や地域性、プロジェクトメンバーの特性などに合わせて運営体制はプロジェクトごとに築きます。また、地域の団体が連携協力する場合もあります。全てのプロジェクトに伴走する一般社団法人谷中のおかってと文化支援のさまざまな知見を有するアーツカウンシル東京、日本を牽引するリーディングプロジェクトを積極的に実施している東京都が共同主催として連携することで、このように先鋭的な文化事業が実現しています。

＊福祉施設だけでなく福祉を目的とした団体や事業所を含む。

ウェブサイトには32*の事例が掲載されています。

この活動から得られた知見をその場に立ち会えない多くの人々と共有するため、ウェブサイトを通じて情報提供をしています。
この事業に参画している福祉施設はその規模や組織の形態、利用者の特性もさまざまで、関わるアーティストも造形美術や作曲、踊りや参加型のパフォーマンスなどジャンルは多岐にわたります。福祉施設でアートプロジェクトを実践してみたい方や、施設利用者とのプロジェクトに関心のある方にとって参考になる事例がたくさんあります。その過程や変化について映像や記事で紹介しています。年度ごとに繰り広げられるその貴重な実践の様子を、ぜひご覧ください。

＊2025年3月時点

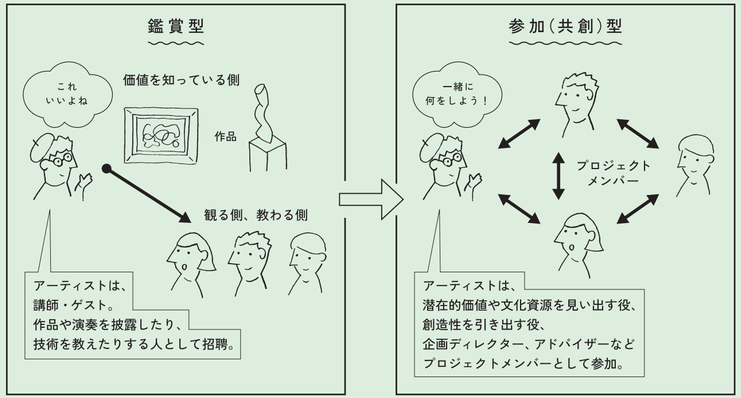
2022年度から2024年度までの全プロジェクトの動向を紹介。
https://turn-land-program.com/case_year/2024/

プロジェクトの運営について

1 分からなくても大丈夫。

アートのプログラムというと、美術作品などの創作活動をイメージする方も多いと思いますが、この事業は、作品を鑑賞したり、コンサートのように演奏を聴いたりすることだけにとどまりません。価値が既に明らかなことを軸に展開する「鑑賞型」で企画を考えるのではなく、その場にいる人たちと一緒に価値を生み出そうとする「共創型」で進めていきます。すると、創造的なプロセスに慣れていない人は、「これから何が起きるか分からないことにどう関わっていいか分からない」といった不安を感じるかもしれません。しかし、プロジェクトメンバーがどのような役割を担うかは、協働するなかで見出されるものであり、作品のありようやこのプロジェクトの価値すらも関係性を育む中でつくるものなのです。はじめのうちは「分からなさ」と向き合いながらプロジェクトを動かしていきます。

「鑑賞型」から「共創型」へ



2 顔出し NG、でも大丈夫。

この事業では、活動の様子を写真や動画で記録し、ウェブサイトなどで関係者以外にも知見を共有することも大切にしています。福祉施設によっては、施設の状況や利用者の情報を公開することが難しい場合もあります。広報の仕方についても事務局とプロジェクトメンバーで相談しながら検討します。また、施設規模もさまざまなので、複数人の受け入れが難しい場合もあります。
共創型の場合は、その施設や地域の特性に合わせてどのようにプロジェクトを形づくるかをアーティストと一緒に考えることがとても重要です。福祉施設の状況に応じて継続的な展開を視野に入れながら、成果の考え方や評価手法などについても検討します。福祉的手法だけではケアしづらい領域については、文化の持つ特性を活かし、文化施設や街なかでの文化企画には参加することが難しい人々が参加できる機会をつくれるように運営計画を立てます。

3 関わる人々の「気づき」がプロジェクトを形づくる。

新しい何かを生み出そうとするこの事業では、対話を大事にします。これまでにない挑戦をしようとするので、前例もなく、答えはプロジェクトメンバー全員で導き出します。プロジェクトが終盤になり、何かが生まれた時、それをどう鑑賞したらいいのかさえも開発する必要があります。プロジェクトに関わる一人一人が感じたことを表現し、それを受け止め合うことで徐々に新しい風景を共有します。「あなたはどうだった？」「あなたにはどう見えてた？」と他者を尊重しながら問いかけ合い、新しい風景と出会う。その時間にたくさんの価値が見出され、私たちが見ている当たり前の風景が少しずつ更新されていくのです。

運営プロセス

鑑賞型

運営体制：
企画担当者が運営をする

企画調整：
アーティストへ依頼

広報：
集客

評価：
集客人数、満足度調査など

参加（共創）型

運営体制：
関わりながら役割を見出す

企画調整：
アーティストと企画会議
＋手法の開発

広報：
協力者集め

評価：
関係者へのヒアリング調査、
ピアレビューなど

鑑賞について

鑑賞型

鑑賞する対象（作品や演奏）の
価値説明
＋
鑑賞教育

参加（共創）型

「鑑賞する対象は何か」
「価値は何か」を対話
＋
鑑賞の仕方も同時に開発

4 合理的配慮はプロセス全てに必要。

鑑賞型の企画では、そのプログラムの本番のみ、つまり開催時に配慮が必要な方への対応が主になりますが、この事業は障害のある方との共創も視野に入れているため、プロセス全てに合理的配慮が必要になります。例えば、プロジェクトメンバーに聴覚に障害のある方がいる場合には、企画会議の時にも手話通訳を毎回手配したり、文字情報で資料を事前に共有したり、その方の特性や状況に合わせて適切な対応を検討する必要があります。障害のある方が協働できる状況をつくることで、多角的な意見をプロジェクトに反映する機会となり、多様な特性の人々との共創が可能になります。

5 事務局メンバーもプロジェクトメンバー。

アートプロジェクトの経験が豊富な事務局メンバーがプロジェクトメンバーの一員となり企画や運営体制づくりなどにおいて伴走支援をします。福祉職員が普段とは異なるクリエイティブなプロジェクトの運営について困ったらすぐに事務局に相談ができます。アーティストも、福祉施設や障害当事者と関わる上での不安や懸念について、直接福祉職員に相談することができます。また、必要に応じて事務局メンバーと打ち合わせをして、プロジェクトの課題を整理することもできます。プロセスに多様な人々が参加するこの特異な状況で、次の一手に迷った時は、事務局メンバーに相談できる環境が整っています。

障害者の参加（合理的配慮）について

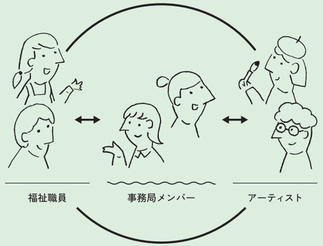
鑑賞型

本番のみ
→ バリアフリー対応での鑑賞
（鑑賞を諦めることが多い）

参加（共創）型

プロセス全てに必要
→ 社会的障害が起きづらい
企画を開発

ex.
普段通う施設での開催だから安心。
出入り自由。開催時間を短くなどの配慮。
表現ジャンルの特性について理解が深まる。



TURN LAND プログラム
の
FAQ

なぜ福祉施設でやるの？

・障害のある方々が落ち着いて時間を過ごせる環境（設備や習慣、人との関係）がある。
・個々の特性と向き合う習慣がアートと親和性が高い。
・どんなに文化施設がアクセシビリティを高めたとしてもさまざまな理由で文化施設などに行くことができない障害のある方たちにアートを届ける。

なぜアートプロジェクトをやるの？

・医学的アプローチとは異なる手法での社会参加を促せる。
・既存の価値とは異なるこれからの社会に必要な新たな価値を生み出せる。
・さまざまな立場の人が学び合える対話の場をつくることができる。

伴走する事務局はどんな人たち？

・公的な機関とのアートプロジェクト運営の経験がある。
・多様な障害特性の方たちとの協働経験がある。
・福祉や文化など専門家と協議できるコミュニケーション力がある。

どんなアーティストが関わるの？

・共創する場づくりに理解や関心がある。
・福祉施設の職員や利用者とコミュニケーションが取れる。
・福祉施設の方針や関わる人々を尊重した上で創造的な姿勢がある。

音楽やダンス、演劇、映像、手工芸など表現のジャンルはさまざまです。表現手法よりも、新しいものをその場に関わる人々と生み出そうとする姿勢を重要視している。

プロジェクトにかかる費用は？

・企画の内容と同様に予算規模や使途についても事務局を含む主催者と福祉施設およびアーティストと協議し決定する。
・事業における協力内容や契約書の取り交わしの可否などは事前に事務局と協議のうえ、プロジェクトに係る費用を決定する。

どんな成果を期待している？

参加者に期待する成果は「仲間」と「有意義な時間」の獲得

① 参加した人々が、有意義なひとときを分かち合い、時に専門的に相談できる多様な仲間ができること。

福祉施設には障害のある方を含む多様な方が日常生活をするための工夫がたくさんあります。その知見は障害の有無に関わらず、高齢化社会を生きる／さまざまな障壁を乗り越えて生きる人々にとっても有意義な気づきを与えてくれます。この事業に参加する人々は、さまざまな人との協働をとおして普段出会わない価値観や考え方を持った人々と出会う機会を得ます。人の営みの奥行きを体感すると同時にアートや福祉の専門的な視座を知る機会となり、「違い」が負荷となる関係ではなく、互いに学び合える仲間となり、生きる力につながることを期待します。

② 習慣や視野が異なる人たちとの交流によりたくさんの気づきが得られること。

アーティストの提案する手法を体験し創造性を育む対話を重ねることで、施設の日常にある魅力を再発見したり、思いもよらない価値に気づいたりすることがあります。福祉職員は支援のあり方について新たな気づきを得たり、アーティストにとっては普段磨いた表現力が社会の中で予想もしていなかったところで機能したり、利用者にとっては「支援される側」という立場を超えて活躍できる機会となります。

期待する社会的な成果は
「社会包摂的プログラム事例」としての提案「社会参加の機会」の創出
そして普段文化施設に行けない人々の「文化体験」の創出

① 障害のある方を含む多様な方たちとの事業を展開しようとする多くの人々が参考にできるプロジェクトの事例を残すことを目指します。

多様性が重要視される時代になりましたが、実際にさまざまな当事者の意見を反映させたプログラムをつくることは容易なことではありません。福祉職員の経験値と

アーティストの企画力を掛け合わせることで初めて実現できる稀有な事例ばかりですが、規模や障害特性に関わらず「違い」を超えて何かを成し遂げようとする人々による取組を事例として発信します。

② 障害のある方にとって、就労とは別の地域貢献や社会参加の機会をつくることができます。

本事業では、施設の利用者を対象としたアートイベントをするのではなく、利用者も職員もプロジェクトメンバーとなり協働する文化プログラムを実施することを通して、参加者がインクルーシブ社会・共創社会の実現の一助となることができます。アートの時間では、「利用者」という立場を超えて、文化活動に寄与する個人として振る舞うことができます。

③ 本事業は、人と人が出会い、関わり合いの中で表現し合いながらかけがえのない時を生み出す文化体験そのものでもあります。

このプロジェクトは福祉施設の日常の中で行われますが、ふとした瞬間に、社会的な責任や時間から一歩外れたような時間を体験することがあります。普段より少し枠を広げてみたり、夢中になってみたり、過度にエネルギーを費やすことで、結果的にウェルビーイングな状態に近づくことを目指します。課題の解決や成果を出すことに集中するだけでは頭で考えられる範囲の出来事に留まってしまい、現実を超えたものを求める精神を満たすことはなかなか難しいものです。それは闇雲にやってできることではないので、経験値のあるアーティストやアートマネージャーたちとチームになって取り組みます。そういったことの実践を、福祉施設で行うことそれ自体もいわばアートであり、その経験は文化を紡ぐ力を育みます。

TURN LAND プログラム　ウェブサイト

https://turn-land-program.com/

● 2022年度から2024年度までの全プロジェクトの動向を紹介。

https://turn-land-program.com/case_year/2024/

● プロジェクトのダイジェスト映像や、アーティストインタビュー、などを紹介。

https://turn-land-program.com/archives_post/

プロジェクトレポート

10の取組

2024年度は10のプロジェクトを実施した。本事業に参画して1年目のプロジェクトもあれば3年目のプロジェクトもあるが、各プロジェクトをメンバー構成／活動紹介／参加者の声の順に紹介している。1年目のプロジェクトは試行実施でありながらもアーティストと施設がしっかりと出会った痕跡が記録として刻まれている。そして3年目のプロジェクトはプロジェクトメンバーのチーム力が高まり、1〜2年目までは個々に異なる思惑を抱いて集っていたが、いつしか誰の思惑とも言い分けられない「ねらい」を抱いてプロジェクトを進めるように変化した。3〜6ヶ月に渡る濃密な交流の軌跡を限られたページで語る無理を承知で、どんなメンバーが集い、どんな風景を見ていたのかを、キーワードや写真、参加者たちのコメントから想像してみてほしい。

TURN LAND

だんだん

「わがまま」で自己表現し合い、地域と出会った3年目。

プロジェクト名

池上わがまま準備室

参画施設・団体

気まぐれ八百屋だんだん

八百屋や寺子屋、こども食堂をはじめ、みんなの居場所と出番をつくり出す、民間型の文化センター。

大田区立池上福祉園

重度の知的障害のある方の、生活の充実と地域での社会的自立を目指す施設。

ステップ夢

アルコール依存症の方を主な対象として作られた社会復帰・社会参加の訓練施設。

プロジェクトメンバー

青木 亨平（アーティスト）
藤田 龍平（アーティスト）
田村 将理（研究者）
近藤 博子（気まぐれ八百屋だんだん 代表）
澤田 有司（気まぐれ八百屋だんだん 事務局）
吉野 和（池上福祉園 施設長）
金子 航（池上福祉園 支援主任）
大内 伸一（ステップ夢 施設長）
TURN LAND プログラム 事務局

アーティストプロフィール

青木 亨平
Kyohei Aoki

何気ない日常生活のなかでふと物思いにふける時に生じた感覚を伝えるための表現方法を模索している美術作家。向き合う事象に対してじっくりと時間を掛け観察・考察し、さまざまな手法や素材について試行を重ねることで表現したいイメージに近づけていく。繊細なニュアンスにまでこだわった丁寧なアプローチによって「物」としての作品をつくり上げる。

藤田 龍平
Ryuhei Fujita

現在「アーティスト」という呼ばれ方への疑問から肩書きを「図画工作と表現」としているアーティスト。図画工作という行為が持つ魅力や威力を愛し、アートや美術という言葉で規定してしまうことなく何かする人とみる人の間に「表現」が成り立つ形式の探究を続けている。路上や野外での図画工作や美術館での学び合いなどさまざまな分野でコミュニケーション要素の強い活動を続けている。

池上福祉園の施設長を中央に囲むプロジェクトメンバー。最初はどう関わっていいか分からず緊張していた福祉施設の職員たちもアーティストたちの熱意や誠意を受け、次第に率直な意見が言い合える関係になっていった。

田村 将理
Masamichi Tamura

神保町の「美学校」にて実験的な小規模ギャラリーTANA gallery bookshelfを2010年に設立して以来、さまざまな場所で固有の環境条件に即した展示を作家と共に共同企画している。第一子の出生予定をきっかけにあちこち身軽に動けない立場になり、近隣の児童遊園を地域活用するための「途草会」（みちくさかい）を立ち上げた。暮らしのかたわら身近に潜んでいる小さいながらも豊かな可能性を探りつつ、歩いていける「ご近所文化圏」の充実をめざしている。

プロジェクトのねらい

1 「障害者」や「依存症の人」というイメージからではなく、共に生きる「人」として地域と出会いたい。

2 人を巻き込む自己実現や希望、ふとした思いつきなどを含む「わがまま」をきっかけに自己表出する機会をつくりたい。

3 誰もが堂々と自己表現し合える環境として、その道具や振る舞いの作法、習慣などをつくりたい。

このプロジェクトに関わる福祉施設の利用者には、施設で過ごす時間と、地域で暮らす時間がある。そのことを考えると「地域に自分のこと・施設のことを知ってもらう必要がある」とプロジェクトメンバーは考えた。利用者が「障害者」としてではなく地域で暮らす一人の「人」として地域の人々と出会う経験にアートが得意とする「表現」の力が有効かもしれない。「もっとこうだったらいいな」という一人一人の望みを引き出すことがそれぞれの自己紹介にもつながり、それを介して出会う関係性はいつもとはちょっと違う拡がりのある仲間だ。遠慮して言えない「わがまま」を集めていくと、他人に迷惑をかける「わがまま」ばかりではないことに気がついた。多様な人々との関わり合いの中で自分が勇気を出して「わがまま」であろうとしてみること。そのことは自分を生きやすくするだけでなく、ほかの誰かを励ますことにつながるかもしれない。変えられない、受け入れるべきものだと思い込んでいた社会の枠のイメージが、少しわがままな仲間と出会うことでいつの間にかほぐれて、いつもより寛げる時間に変わる。ちょっと素敵な「わがまま」を上手に使う作法を互いに学び合うようなプロジェクトだった。

PROCESS

2024
6/4, 17 顔合わせ | 7/10 | 8/8 | 9/28 地域でのテスト実施 | 10/8 企画会議 | 11/14 企画会議 | 23 | 12/1 | 12/20 振り返り

8/8
企画会議
アーティストと福祉職員が企画について話し合う

アーティストたちはだんだんや池上福祉園、ステップ夢を訪問し、それぞれの近況を聞き、今年度の活動内容について提案した。地域に住む研究者の田村をメンバーに追加したいことや「わがまま」を投函できる「わがままポスト」などを発展させて地域に持ち込みたい旨を伝えると、趣旨は理解でき賛同するが、「わがまま」という言葉を扱う上での懸念や施設内でのイメージ共有が課題としてあがった。それらの意見を踏まえ、今年度の活動内容や適正規模などについて検討を繰り返した。

アーティストがステップ夢で施設長に企画の説明や「わがままポスト」の設置の提案などをして、意見をもらった。

田村をプロジェクトメンバーに紹介し、池上福祉園で施設長や担当職員、だんだんのスタッフと今年度のプロジェクトの進め方や「わがままポスト」の活用方法などについて意見交換をした。

11/23
池上福祉園で実施
改良を重ね園祭に参加

「わがままポスト」やわがままを記入する「わがまま問診票」のプレゼンテーションを繰り返すなかで、素敵な「わがまま」を引き出すためにはもう一歩何かしつらえに工夫が必要なことが見えてきた。そこで、のんびりと自分が抱く「わがまま」について考えたり、そのイメージを分かち合ったりできる場をリヤカーを土台とした屋台形式でつくり上げた。

参加者が「わがまま」を記入した紙をポストに投函する様子。投函するとポストが「素敵なわがままですね」などのコメントをする仕掛けになっている。

記入してほしい「わがまま」について説明する藤田と何を書こうか悩む参加者たち（右）。ファイリングされた「わがまま」（ポストに投函されたもの）を見る参加者（奥の車椅子の方）。

12/1
だんだんで実施
企画に合わせて紙芝居を追加で制作

路上に落書きができる「こども天国」というだんだんの恒例行事に参加。こどもたちの落書きするスペースを奪わないように設置面積をできるだけ狭くデザインした紙芝居で「わがまま」のイメージをこどもたちに伝えることにした。藤田は軽やかな音を鳴らしながら「わ」が描かれた4枚の紙芝居を熱演した。

お店では買えない「わがまま」について紙芝居で伝える藤田と記入用紙を配る青木。

参加者が書いた「わがまま」。紙芝居でこどもたちにも書いてほしい「わがまま」の意図が伝わり、豊かな「わがまま」が集まった。

活動を振り返って

主催する「こども天国」で今後に想いを馳せるだんだん事務局の澤田を田村が撮った写真。

「こども食堂」をきっかけに知名度も上がり、毎年続けていくなかで地域の関係者が多く参画するようになったのは喜ばしい反面、こどもがのんびり路上に絵を描くことを楽しむことが中心にないような風景になってきたことも事実だった。アーティストたちとの交流の中で、「誰のためにやっているのか」「どんな風景が見たくてやっているのか」を問われることも重なり、TURN LANDプログラムを卒業する年になった今、「どのように活動を続けていこう・・・」そんなさまざまな思いが立ち込めるこの一枚を池上福祉園の職員の金子は今年の一枚に選んだ。

昨年度まで池上福祉園の施設長だった宮崎（写真左）。今年度は施設長という立場ではないが2回のお披露目に駆けつけ誰よりもその場を楽しんだ。近藤（写真右）はだんだんの代表で、このプロジェクトを近隣の福祉施設と連携で進めるビジョンを掲げた敏腕プロデューサーだ。まだまだ「理想の地域」は実現できなくても、それを夢見ながら出会いを積み重ね、理不尽さをユーモアで乗り越える大人な振る舞いを二人は見せてくれていた。貴重な学び合いの場を支えていた陰の立役者だ。

自作のポストを首から下げ、「わがまま」を書いた紙を受け取る様子。

メンバーコメント

青木 亨平（アーティスト）

プロジェクトは3年経過しましたが、最後のプログラムで実施した紙芝居は前日の昼から深夜までに制作されたもので、当日初めて人前で披露されました。そこからさらに起こる不具合に対して臨機応変に振る舞っていく様子が印象的でした。その行いは決して簡単なことではなく、その人のこれまでに積み重ねてきた経験が活かされています。ですがこれはアーティストだからできたという単純なものではありません。他者との対話方法とも似ていてやり方をなぞることで同じ結果につながるとは限りません。どんなに時間をかけても正解にたどり着かないというところがこのプロジェクトの肝であり、すべての機会を通じて場所や人が異なればアプローチ方法が変化していくことをまざまざと感じることができました。

藤田 龍平（アーティスト）

「わがままシート」を書いている状況も大事だと思いますが、ほかの人が書いたものをほかの人が見ている、読んでいる状態が達成すべき最初の状況だと思っていました。何かを成すには道具が必要でそれが地域化される必要があります。そのためにはプログラムを実施する側も参加する側も生活や仕事という日常の中でこそ「対話」を楽しめる必要があり、それを図画工作で全力で表現した一年でした。だんだんの澤田さんが新聞紙でつくったポストやサンバイザーが私がつくる道具より軽やかな可愛げがあり「なかなかやるな」というライバル心と学びを得たのであった。澤田さん、その道具ぜひ活躍させてね。

田村 将理（研究者）

参画団体のイベントに参加してプログラムを実施しましたが、イベントの主旨を損ねることなく、適宜、空間や時間の隙間を縫って本格的な現代アートのプロジェクトとしての「わがままポスト」を効果的に提供できました。ある意味では均質的な「賑わい」のなかで、それだけではない体験を一部のイベント参加者に提供できたとおもいます。誰かが興味をもつと、一部のこどもがめざとくサッと集まってくる様子は、賑わいとは別のおもしろさにすぐに気づくこどもたちの感性を示すものとして非常に印象に残りました。
あくまで個人的な印象ですが、TURN LANDプログラムのよいところは、アートが地域や福祉と関わるときにともすれば大規模に起きてしまっているかもしれないある種の典型が持っている乱暴さに対して批判的意識があることだと思います。そして、このプロジェクトのなかで実施されたプログラムのふりかえりが「こんなに盛り上がりました」「利用者さんが（こどもたちが）喜んでいました」だけではなくて、むしろできなかったことや、至らなかったことを、施設や利用者には敬意を持ちつつ、飾らずに共有できるプロジェクトになれば、それは本当に大きな成果となると思います。
これからも継続し、より積極的に実験に取り組んでほしいです。本年度初めて参加しましたが、おかげで地域や福祉といった領域においてアートを本格的に展開することの重要性と、その途方もない難しさが実感できました。これからもさまざまな活動主体が関わり、事務局側でも継続的に人材育成が進むことで集合知としての価値が高まるはずだと思います。

澤田 有司（気まぐれ八百屋だんだん 事務局）

藤田さんが提案された紙芝居をまずこちらから表現するという手法は素晴らしいアイデアだと思いました。いきなりわがままを書いてください！といっても中々思い浮かべてもらうのは難しいようでしたが、紙芝居が自分のわがままを引き出すきっかけになりました。今後自分が活動する時はぜひ利用してみたいなと思いました。わがままをひとつのきっかけとして、これから各施設でこの活動を工夫・改良・発展していってほしいと思います。

吉野 和（池上福祉園 施設長）

施設祭りでのワークショップでは、家族連れや来場者の方が楽しんで参加していました。前任の施設長も来園し、嬉しそうにプログラムを見ていらしたことも印象に残っています。個人的には、賑やかな雰囲気づくりが学びになりました。今後、この活動を通じて地域の方が施設に関心を持って頂けるきっかけになると嬉しいです。TURN LANDに参加して、「地域の中にある施設」という職員の意識を強化することができたと実感しています。アーティストの人々をはじめこれまで交流のなかった方たちのご意見やアイデアが、自分には持っていないものだったため、さまざまな発想を大切にしてプログラムをつくっていくことが重要だという気づきを得ました。

金子 航（池上福祉園 支援主任）

3年間TURN LANDを続けるなかでいろいろな価値観に触れ、否定することなく、皆さんで共有し合えたことが個人的な学びにつながりました。プロジェクトメンバーの皆さんと作品を創り上げたことがプロジェクトの成果です。今後もこの活動を通じて地域の方や利用者が関わり、プロジェクトが終了しても継続し地域に必要とされる場として機能してほしいです。そのためには、継続性と地域と利用者様が一体化することや、継続できる仕組みの必要性を感じています。

宮﨑 裕司
（社会福祉法人大田幸陽会所属、前池上福祉園 施設長）

池上福祉園の「いけいけハートフルフェスタ」から、だんだん主催の「こども天国」まで、多くの皆さんの関心を集めていたと思います。移動式のわがまま屋台、進化したわがままポストとわがまま記載シート、「わ」の紙芝居などがすごくよかったです。「こども天国」の時に、アーティストの皆さんが協力して準備された道具に感激しました。多くの人々が集まる場所で、

また、こどもにもメッセージが発信できてよかったです。
「ブレーンストーミング」「批判厳禁」「新規歓迎」が大切なのだ、という話を研修でよく聞きますし、私もそのような言葉を使います。その通りなのですが、さらに重要なことは「そこから実現に向かうこと」だと再確認しました。20年前、「想いを言葉に、言葉をかたちに、かたちをノウハウに」という話をしてくれた方がいますが、その言葉を思い出しました。このプロジェクトを通じて業界の枠を超えた皆さんと、「何かやってみる」体験とその反応を観られたことが個人的には成果だと感じています。本業に戻すものが数多く見つかっています。また、施設の利用者にとっても、なかったものが「新たに生み出され体験できる」状態になったこと、それを真ん中に新たな人々との関係ができていくこと、が成果ではないかと思いました。まさに、「コミュニケーションアート」ですよね？

大内 伸一（ステップ夢 施設長）

痛い思いや傷ついたりしてメンタルがやられてしまって枠の中に入っている人は、心を緩めたり人とつながりを持つことで回復したりします。藤田さんが制作した紙芝居にはまさに精神の回復が描かれていて、この紙芝居を活用したいと思いました。
ただこの紙芝居の話自体はとても深くて、施設の仕事をする自分の立場としては、枠をハメている側という側面もあります。また、自分自身も枠にハメて生きているところもあり、枠を壊されてしまったらどうしようと想像しました。自分で勝手に枠をつくって、壊されるのではないかと恐れている自分がいることに気づきました。

事務局コメント

だんだんの澤田さんが「ちょっとわがままいいですか？」と企画会議で自分がやってみたいことをコメントしていた。表現が持つ、ニーズがあるか分からない自分本位な特性を「わがまま」と言い表すことでその場をチャーミングな場に変えていた。澤田さんの提案を反映させたい気持ちと「わがまま」という言葉の扱いづらさに最初は躊躇いもあったが、そのすんなりいかない感覚が「共創」の醍醐味でもある。アーティストたちはやりたいことを具現化する「自主性」を軸に置きながら、地域の日常にも通用する「質」の高さを自分たちに課した。

表現を介した出会いの場を実現することを目指し、さまざまな「道具」を開発した。最初に取り掛かったのは「わがまま」を記入する問診票。そしてそれを回収する「ポスト」へと続く。投函口はセンサー内蔵で用紙を認識すると音声が流れる仕掛けつきで、無機質な可愛い声で「それわがままだな～」などとコメントする。想像もしていなかったポストのイメージに、おぼろげであったアイデアが作家ならではの主体性によりサプライズ的に姿を表した瞬間、メンバー一同が心を動かされることになる。構えず飾らない気持ちを引き出せるように作例を保管し共有するファイルの試作は続き、それをさまざまな場で実装させながらリヤカー式の屋台や看板、紙芝居などが次々につくられていった。そして最後に地域の人々がこれらの道具の使いかたを考え、自分なりのやりかたを発見していく手がかりとしてのコンセプトブックとチュートリアルブックをまとめた。

ただ、これらの道具だけではまだまだ自走しない。
なぜなら出てきた「わがまま」に的確に反応しそれらを育てたり、背中を押したり、似たようなビジョンを持つ人とつないだり、彼らはその場でまだまだたくさんの仕事をしているからだ。その場はとてもリラックスしていてゴロっと固まった石が光を放つようなエネルギーに満ちている。

アーティストと施設職員がそれぞれ制作したわがままを伝えるための道具。

このプロジェクトに関する詳しい情報はこちら

● 本プロジェクト紹介ページ

https://turn-land-program.com/case_post/23dandan_2024/

● 本プロジェクト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/project_case23dandan_2024/

藤田作チュートリアル

https://turn-land-program.com/archives_post/case23dandan_2024_fujitatutorial/

田村作コンセプトブック

https://turn-land-program.com/archives_post/case23dandan_2024_tamuraconceptbook/

青木作わがままポスト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/case23dandan_2024_aokiintroductionmovie/

TURN LAND

ラ・マノ

時間をかけて みんなで作った ユーカリのテラス。

プロジェクト名

ともに在る場所

参画施設・団体

クラフト工房 La Mano（ラ・マノ）

ラ・マノは、町田市の住宅街の里山のような森の中にあり、障害のある方が手仕事の物づくりを行っている場所。藍や草木で糸を染めたり、染めた糸を使っての織り、刺しゅうなどのクラフト製品の制作や、小さなアトリエで個々の豊かな表現活動を行っている。

プロジェクトメンバー

水内 貴英（美術家）

高野 賢二（ラ・マノ 施設長）

三澤 稔生（ラ・マノ 職員）

齋 ジュリア 愛（ラ・マノ 職員）

森田 麻美（ラ・マノ 職員）

TURN LAND プログラム 事務局

アーティストプロフィール

水内 貴英

Takahide Mizuuchi

通称：ジョニー。芸術祭や福祉施設などを活動の場としながら、関わる場所や状況に呼応する作品を国内外で発表しているアーティスト。使う素材や手法は状況に応じて異なるが、大掛かりな大工仕事のようなものからコミュニケーションをベースとしたイマジネーション重視のワークショップまで数多く手がけている。

photo: 金子愛帆

本番にはラテンミュージックバンド「La Maña（ラ・マーニャ）」（写真左2人）をゲストに迎えた。

写真左が水内、中央が施設長の高野、ほかが担当職員。毎年新しい職員がプロジェクトメンバーに追加され、職員一人一人の個性が生きる能動的な参加がプロジェクトに拡がりを与えた。

プロジェクトのねらい

1 まだラ・マノを知らない地域の人が来て、そこにいつも通り利用者がいても寛げるようなひらかれた場をつくりたい。

2 利用者のやりたいことを仕事としてではなくのびのびやらせてあげたい。

3 ユーカリをシンボルとしたテラス＝多様な人々が共に居られる場所をつくりたい。

職員と利用者のみんなが入れ替わりながら少しずつ関わり「ともに在る場所」をつくり上げた。1年目は職員を集めて一人一人が感じていることを話せる場をつくることから始めた。施設の日常にこのプロジェクトの時間をどうデザインするかがポイントだった。2年目はお昼休みを延長してアーティストとの無為の時間を利用者も職員も一緒に過ごす習慣をつくった。何かのための時間をアートに使うことに抵抗がある人もいたので休み時間を延長する案は画期的だった。利用者と職員の両者が仕事への責任感や義務感から解放され、普段よりもリラックスして交流できる時間が生まれた。その関係ができたことで、施設行事での発表ではなく別企画としてみんなが自主的にやりたいことを盛り込んだ企画を協力して実現することができた。また、ラ・マノに来たことがない人が訪れやすいように入り口に大きめのポスター看板を掲示したり、工房などを案内するツアーを実施したことで地域の家族が訪れ、利用者たちとの交流の幅も広がった。

PROCESS

2024
6/5, 19 顔合わせ | 7/23 | 9/3, 12 企画会議 | 9/17, 18 | 10/22, 25 企画会議 | 27 | 12/11 振り返り

7/23 企画会議

地域連携の可能性を探る

近隣の学校や病院などを調べ、地域との連携の可能性を探った。そしてアーティストとラ・マノの職員、TURN LANDの事務局メンバーが一緒に地域リサーチに出かけ、アーティストとつくったテラスをどのように活用できるかについて話し合った。

理想とする地域との関わりについて語る薬師台メディカルTERRACE代表の野口。

ラ・マノで企画についての会議。この活動を通じて、テラスをラ・マノの来場者だけでなく施設の利用者や職員も楽しめる場にしていきたいと語った。

9/17 9/18 共同作業日

3年がかりで実現した新たな交流拠点

共同作業日には利用者一人一人の個性に応じて、できること、やりたいことを見つけて各々が無理なく参加できるように職員やアーティストが考案したいくつかの作業が用意された。1年目に土台となるステージをつくり、2年目にはそこを囲うようにテーブルを制作した。3年目の2024年はスロープや階段、床のタイルがつけ加えられ、ユーカリのテラスは完成した。

カンナで木を削る作業をする水内と利用者。荷物運びや枝を拾い、穴を掘って階段を取りつけるなど、たくさんの作業を協働しながらコミュニケーションを楽しんだ。

得意のダジャレを言いながら穴を掘る利用者。水内の手伝いを積極的に行う利用者。資材を選ぶ様子。

10/27 企画実施

職員と利用者の「やってみたいこと」を盛り込んだツアー企画を実施

利用者がコーヒーを淹れたり、焚き火でマシュマロを焼いたり、敷地内で拾い集めた木の実を使ってシェイカーをつくったり。昨年度テラスでコーヒーを飲みながらみんなで夢想したさまざまなアイデアを盛り込んだツアープログラムを実施した。

マシュマロを焼きながら話をする利用者とツアー参加者。

自作のシェイカーを振る利用者とゲストのラテンミュージックバンド『La Maña（ラ・マーニャ）』。音楽を介したコミュニケーションを楽しんだ。

活動を振り返って

完成したテラスの様子。階段とスロープを設置し、誰もがテラスに上がりやすくなった。

ラテンミュージックに合わせてツアー参加者と利用者、職員がテラスを囲み一緒に踊った。

密になるリスクを気にせずのんびりできる野外のテラスは、工房ごとに分かれて作業を行う利用者や職員にとって息抜きのできる場所になっている。野外だからこそメンテナンスも大変だが、枝や落ち葉を運んだりする作業の手間も共同作業のきっかけとなる。また、職員からはお願いしづらいような負荷の多い作業も、アーティストとの時間であれば利用者が自ら率先して意欲を示す姿もあり、やらなければいけない「仕事」とは異なり、やりたいからやってみる「協働の時間」が新たな関係性を育むことも印象的だった。

メンバーコメント

水内 貴英（アーティスト）

3年間のプロジェクトでしたが、私が実際に現地に行って活動できた時間はごくわずかだったように思います。それでも3年間の時間が何かを生み出しているのは間違いなく、じゃあ何が3年間を紡いでいるのかと考えて、ああ、みんなでつくった場所（テラス）がずっとそこにあったんだなと気づきました。あらためて言うと全く当たり前のことではありますが、関係性や体験を内包した場がただそこにあり続けるだけでも、時間と共にとても大きな変化を生んでいくんだなということに気づかされました。
一般的に、短い期間で企画から実施まで駆け抜けるようなプログラムが多いなかで、3年をかけることができたラ・マノのプログラムは、長い時間をかけてつくり出すアートプロジェクトの良さをあらためて感じることができたプログラムでした。
具体的な「場所」をみんなでつくる過程が関係性と体験をつくることにつながり、つくった場所がまた新たな関係性と体験をつくっていく、その関係性が新たな場所のためのアイデアを生み…というような場所・関係・体験のドミノのような動きを関係者全員で体験できたことが多々ある成果のうちの一つです。

高野 賢二（ラ・マノ 施設長）

1年目、2年目は、まず意図的にメンバー（利用者）やスタッフがTURN LANDプログラム自体に関わる時間や要素を増やすことを、大事に進めてきました。3年目はそのプロセスを踏まえた上で、地域の人々に波及しどうつながっていくかをみんなで相談し考え、ツアーという独自の形をつくり、さまざまなラ・マノならではの体験をしてもらえるプロジェクトになりました。その過程や本番を楽しく、みんなでできたことがこのプログラムに関わってきて、とても嬉しいことでした。日常的にお弁当を食べたり、リフレッシュの時間を必要とするメンバー（利用者）さんが過ごす場になっていましたが、今後はまた違う形で、地域の人々も含め使ってもらったり、活かしていきたいと思います。

坂口 実奈（ラ・マノ 職員）

ラ・マノのメンバー（利用者）と来場者の笑顔や関わりが今回の成果だったと思います。ツアー実施後、メンバー（利用者）がグループホームでサルサを踊っていることを話したそうで、楽しめた様子がうかがえました。これからもメンバー（利用者）が楽しめて、来場者がラ・マノと関われる場になっていってほしいです。

齋 ジュリア 愛（ラ・マノ 職員）

2年目のデッキができた状態からの参加で自分に何ができるか不安だったけれど、通常よりテラスづくりに対してメンバー（利用者）さんの自発的な動きが見られました。今年度の本番では、お客さん、メンバー（利用者）さん、学生さんたちと楽器づくりを手伝え、一緒に作業することで楽しめたことが実感でき、とても良かったので染織展以外でもテラスが有効活用できればと思っています。

三澤 稔生（ラ・マノ 職員）

コロナ禍以前は母屋でスタッフ、メンバー（利用者）全員で集まっていたのに、コロナ禍でバラバラになってしまったのですが、テラスができたことにより、新しく交流できる集える場が外にできたことが非常にありがたいです。

酒井 結希（ボランティアスタッフ・学生）

利用者さんの姿、参加された方の交流を見て、安心できる場所、人、物が揃っているからこそ活き活きと活動ができ、そこから人との関わりが広がることを学ぶことができました。
保育ではよく、愛着関係を大切にと言われ、こどもと関わる際には自分がこどもにとっての安全基地になるように、そこからこどもが挑戦したいと思えるようにと意識します。ラ・マノと利用者さんの関係も同じようで、リラックスできる自然豊かな工房の中で関係性のある職員の方、継続的に行っている仕事があるから情緒が安定して過ごせるのではないか、そしてこのプロジェクトでさまざまな人と交流を楽しめるのではないかと思いました。

蓬田 美青（ボランティアスタッフ・学生）

今回、障害のある方がいる施設でのプロジェクトに参加して、一緒に体験している場で利用者さんが何を楽しみ、どのように同じ時間を過ごしているのか知ることができました。また、参加者や、利用者さんと関わり、いろいろな人と交流することの楽しさに気づきました。障害の有無に関わらず、いろんな人が集まって一つの場所をつくりあげたことがプロジェクトの成果だったと思います。利用者さんと地域の人々と交流をすることで、お互いの理解を深め、多様な人と関わる楽しさに気づくことに意義があると思うので、これからも利用者さんと地域の人々との憩いの場として機能してほしいと思います。

事務局コメント

1年目に水内がユーカリの木をシンボルにプロジェクトを展開するビジョンを描き、ユーカリの木を囲む形でデッキをつくり始めた。利用者たちは水内を歓迎し嬉しそうに作業をした。時間が経つにつれ、水内が来ていない日常的な時間にも休憩しにいく利用者が出てきた。テーブルができると、お弁当を食べたり、そこで絵を描いたりしながら、テラスでの楽しい思い出を重ねていった。最初はこのプロジェクトにどんな姿勢でどう関わっていいか戸惑っていた職員もいたが、買い出しに行ったり、利用者を呼びに行ったり、具体的な関わりが増えるにつれて次第に力まずに関わってくれるようになったことがとても嬉しかった。作業ができないくらい日差しが強い夏、降り積もる枯葉に埋もれる秋などを乗り越えてあのテラスが愛され続けることを期待したい。

水内（通称：ジョニー）が施設を訪れた時の目印。

このプロジェクトに関する詳しい情報はこちら

● 本プロジェクト紹介ページ

https://turn-land-program.com/case_post/24lamano_2024/

● 本プロジェクト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/project_case24lamano_2024/

TURN LAND

西荻ふれあいの家

いくつになっても
生む喜びを。

プロジェクト名

「編み物」と「曲づくり」

参画施設・団体

高齢者在宅サービスセンター
西荻ふれあいの家（ももの会）

認定特定非営利活動法人ももの会が運営する「西荻ふれあいの家」は、“人と人とをつなぎながら地域に根ざした福祉の街づくり”を目指す、高齢者在宅サービスセンター。NPO法人としての特長を発揮しながら、人間としての尊厳を守り、生きる喜びのあるデイサービス事業をしている。

プロジェクトメンバー

伊勢 克也（アーティスト）
SKANK（音楽家）
梅谷 則子（西荻ふれあいの家 施設長）
宮 浩子（ももの会 理事）
TURN LANDプログラム 事務局

アーティストプロフィール

伊勢 克也
Katsuya Ise

自然／人工物／メディア空間等さまざまな環境で発生し存在するモノやイメージが形づくる形態をテーマに作品を制作し、さまざまなワークショップも行っているアーティスト。高齢者が大好きで、西荻にある高齢者在宅サービス「西荻ふれあいの家」で編み物に邂逅、以後フリースタイルニッターとしても活動している。

photo: Ayaka Umeda

SKANK
スカンク

振付家、映像作家、音楽家によるパフォーミングアーツカンパニー"Nibroll"で2005年から2023年までの全作品の音楽を担当。また音楽家や他ジャンルのアーティストとも積極的にセッションしており多くの身体表現の舞台に楽曲の提供、演奏、コラボレーションを国内外で行っている。近年では国内外の映画音楽の担当や2015年より個展を開催するなど活動の幅を広げている。

photo: 深澤孝史

音楽が好きなスタッフが多いふれあいの家の職員たち。親しみやすく明るい雰囲気が利用者だけでなくアーティストの心も穏やかにする。

プロジェクトのねらい

1 将来的に多世代交流ができるような施設のオリジナルソングをつくりたい。

2 年を重ねた人々の美に触れながら一緒に作品をつくりたい。

アーティストの伊勢はふれあいの家の利用者たちとの交流を通じて編み物と出会い、編む楽しさにすっかり魅了され、編み物でオブジェのような作品を制作するようになった。その作品を、2023年度からふれあいの家の利用者たちと制作するようになり、参加した利用者たちは設計図のない自由な編み物に戸惑いながらも回を重ねるごとにその自由の楽しみ方を覚えていった。いくつになっても新しいことを始められる、いくつになっても創造する喜びを分かち合う時間や、それらが社会化される経験は大切な仲間と奥深い安心感を私たちに与えてくれる。

2024年度は施設がある地域に住む音楽家のSKANKを招いた。施設の人々にとって、地元の話で盛り上がったり、施設外でばったり会えたりする新たな仲間が増えた。音楽プログラムを熱望していた職員たちに歓迎され、繰り返し施設に通い丁寧に利用者たちと出会いを重ねていく。共に過ごす時間を重ねながら、少しずつ関係を築き、響き合いの中で愛おしい何かを生み出そうとする2つのプロジェクトが並走している。

PROCESS | SKANK

2024
5/29, 6/20 顔合わせ | 7/24 | 8/15 | 26 | 9/20 | 30 | 10/15 | 19 | 11/26 | 12/19

7/24 8/15 8/26 9/20 9/30

施設見学

利用者の活動に参加し交流

曜日によって施設に居る利用者が異なるため、繰り返し施設に通い、何度も自己紹介を重ねた。茶道や書道、音楽や健康麻雀などのレクリエーションに参加し、一緒におやつを食べたり送迎の車を待ったりしながら少しずつ利用者と出会いを重ねていった。

職員からマイクを受け取り利用者たちの前で自己紹介をするSKANK。

SKANKが健康麻雀で利用者と交流しながら利用者の仕草などを観察する。

10/15 10/19 11/26

アイデア共有

利用者との交流から着想を得た新たな曲づくりの手法を模索

SKANKは利用者との交流の中で利用者たちが使用する言葉の中から印象的な言葉をメモしていた。それらの言葉をカードにし、配列を並べ替えることで利用者たちと曲づくりができないか職員と話し合った。言葉の数ごとに旋律を決めるのはどうか、利用者にとって難しいと思うかなどを尋ねたが、職員にとってもイメージするのが難しい様子だった。

SKANKが職員にアイデアについて話す様子。

「なんか」「やわらかい」「だいすき」「ふれあいの家」などの言葉を切り抜いた紙を入れ替えながら説明している。

12/19

アイデア共有

職員と協働しプログラムを具体化していく

文字数とメロディーを関連させた曲づくりプログラムのアイデアを共有するため、パソコンと紙のカードを使ってデモンストレーションした。それを受け、職員からは普段利用者と楽しんでいる替え歌遊びの紹介があり、利用者たちの特性や能力について話しながら具体化するための課題などを共有した。

交流を重ねるなかで選んだ言葉を紙に印刷し、それをホワイトボードに貼り、考案したい曲づくりプログラムのイメージを伝える。

SKANKがパソコン上で作曲する様子を「こんなふうに作曲するんでね〜」と感心しながらみる職員。

2024
7/26, 8/15, 22, 9/14 | 10/30, 31 | 11/22, 28, 12/19

7/26 8/15 8/22 9/14

編み物制作

編み物作品群が次々に完成

利用者たちと一緒に編み進める伊勢は、制作途中の作品をいつも持ち帰り、家でその続きを編む。毎度持ち込まれる時には新たなパーツが追加されていて、利用者たちはそれを眺めてからその先を自由に追加していく。最初の頃は設計図のない自由な編み物に抵抗を示していたり、合っているか不安になってすぐに解いてしまっていた方もいたが、慣れてくると伊勢の想定をも超えて堂々と気兼ねなく編む方が増えていった。

編んだ作品を頭に被って広げ、みんなと見ているところ。

集中して編み進める伊勢と利用者。

10/30 10/31

展示を観に行く

積み重ねた大切な時間をお披露目する

利用者と職員が国際フォーラムを訪問し、伊勢と一緒に編んだ作品たちが展示された喜びを分かち合った。

東京国際フォーラムで開催された「だれもが文化でつながる国際会議2024」で展示された作品。

展示を観に訪れた利用者たちを迎える伊勢。作品を身につけて楽しむ利用者。

11/22 11/28 12/19

振り返り

写真で交流の過程を振り返る

展示を観に行った際の写真を伊勢が印刷して施設に持って来た。利用者たちは大きく印刷された写真に喜び話が盛り上がった。利用者たちにとって印刷された写真は流れゆく日々を立ち止まって確認するのにとても大事なものであることや、発表の機会があることが日々の活力に直結することなどを共有した。

伊勢は利用者たちの喜ぶ顔が見たくてたくさんの写真を印刷してきた。

伊勢と職員、TURN LAND プログラムの事務局メンバーがたくさんの写真を机に広げてこれまでの活動を振り返る様子。

活動を振り返って

利用者の手が魅力的な写真。

施設長の梅谷は利用者の手に美しさをみていた。アーティストの伊勢もプラスティックよりも金が似合うような高齢者の肌に魅了されているという。可愛らしさを併せ持つ利用者たちの存在が職員やアーティストの精神を歓喜させる。誰かを喜ばせたくて出来事をつくる、そんな行為の積み重ねが一人一人の精神を励まし合い活力を生み出す場をつくり出している。

編み物はしないけれど、いつもその場に参加して機嫌よくおしゃべりをしている利用者が伊勢の作品を持って笑っている。やってもやらなくてもいい、それが前提にあることが共に居ることを可能にし、貴重で豊かな「今」を下支えしている。

メンバーコメント

伊勢 克也（アーティスト）

皆さん楽しんで喜んでくれて良かったです。
前身のTURN事業の時に、アートがとか、アーティストが、ではなくその場に面白く新鮮なことが起きることが大事なことだと気づいたことは大きかった。
ボクはそんなアートがどうとか言ってないですし、思ってもいなかった。そんなの変だとも思っていましたし。
皆さんが毎日の始まりと終わりのほんの30分程度の時間につくってくれた思いもよらない小さな編み物はドキドキする素晴らしいものでした。
スタッフさんのアシストや創造力でいろいろな編み物が形づくられていったことは、とても興味深いものでした。それによって創造の喜びやつくる楽しさが更新されていくことを感じました。
展示前のひと月くらいは、週末行って持ち帰ってつくって月曜日朝戻すということもしてましたもんねー。楽しくてしょうがなかったです。
そんなやりとりででき上がった素晴らしいマカロニを今回国際フォーラムでお披露目したわけですよね。
イベント全体の中ではほんの小さなエリアですけれど、全く観念的ではないリアルな実践が提示できたんじゃないかなと思ってますよ、ボクは。
それは皆さんが会場に来てあの場に直に関わったことで正にリアルとなりました。
会場にいたスタッフさんもそれを感じていましたよ、ボクにはそう見えました。
結果的にみんなで現代のアートを実践していたということですよ。
今後どうなるかは分からないけど、皆んなで編み編みする至福の時間、あの時間だけは大切にしていきたいなあと思っています。
実はボクは今回初めて誰かを想いながら作品をつくりましたよ。
おそらく思い出す限り、、、初めてです。。

SKANK（アーティスト）

「歌」をつくる、渡す、歌ってもらうというのはどういうことなのか？
まずはどういう施設でどういう人々が利用しているのかを見学をさせて頂くことと、自分にどういう立ち回りができるのかを探るところから始めました。
スタッフさんの気配りと素早さ、連携が素晴らしく邪魔をしたくない、「歌づくり」が重荷にならないようにしたいという想いがありました。
また個性豊かな利用者さんたちとの関係は時間がかかっても個人個人と丁寧につくっていきたいと思っています。
歌のプログラムを見学させて頂いた時に「そうだよな～。歌は好きな歌を何度も聴いていつの間にか覚えてしまうのが良いよな」「好きなフレーズだけ歌えれば良いよな」「1曲覚えるのは大変だよな（私にとっても）」と思いました。
また歌を聴くのは好きだけど歌うのはあまり好きではない方もいると思います。
歌わなくても参加できる、覚えるプレッシャーがない、そんな歌がつくれないだろうか？
そう考えているなか、健康麻雀に参加し牌を並び替えている時に歌カードを思いつきました。
言葉集めは続けます。
言葉を集めること、まだ利用者さんとそんなに会話ができていませんが聞こえてきた会話からその人のことをちょっと知れたり言葉（歌）を見つけたりすることが楽しいです。耳を傾けることで「ふれあいの家の歌」ができ上がれば自分にとっても幸いです。
実際に利用できるカード（歌）にするにはどうしたら良いのか？まだまだ詰めていくことはたくさんありますが運用の仕方などスタッフさんにも相談しながら、また昨年より施設に通うことになった母（別の施設ではありますが）との会話の中からも形にしていく方法を探っていきたいと思います。
「好きな言葉を選ぶ（歌をつくる）」ということがつながりや何か良いきっかけになることを願ってつくっていきます。

宮 浩子（ももの会 理事）

国際フォーラムの展覧会はお年寄りにとっても私たちにとっても有意義なことだったと思います。何がなんだか分からないでひたすら編んでいたものがあんな風に飾られると輝いてみえるのを目の当たりにして、アートと日常がつながった気がしました。心なしかあの後は皆さんの編み物熱が増したような気がします。施設長の梅谷さんまで編み物を始めちゃって、手と頭を使うのでリハビリにも最適です。

梅谷則子（西荻ふれあいの家 施設長）

気がつけば、編み物の参加者の平均年齢は90歳を超えていました。若いころに編み物をしていたことを思い出し、眼鏡もかけずひたすらしかも手早く編む姿に、プロジェクトに参加していただくことで残存能力を引き出す可能性を感じました。普段、手仕事やおしゃべりに積極的でない利用者の方も編み物や会話に参加していて、不思議なものにもテーマがあれば参加してくださる受容力があることに面白さを感じました。このプログラムを通じて、参加者の可能性を高齢者だからといって制限せずに、自由度をもって取り組むことが重要だと感じました。来年度はSKANKさんとの歌もできそうなので、ますます発展していきたいです。

事務局コメント

TURN LANDミーティングへの積極的な参加や、伊勢のアーティスト活動について知る機会を経て、職員とアーティストがさらに一歩踏み込んだ姿勢でこのプロジェクトと向き合う様子があり嬉しく思う。ほかの施設の取組を知り、さまざまなアーティストの存在を知り、プロジェクトの展望に対する想像力も広がっていったようだ。いい意味で野心的に楽しんでいることが、長期的な視野や表現の機微を受け止める懐の深いコミュニケーション力につながっているのだろう。異なる世代の人が関わって楽しめるプログラムができてきているため、これからの展開が楽しみだ。

編み物の作品とどこか類似する伊勢の素描集。

このプロジェクトに関する詳しい情報はこちら

● 本プロジェクト紹介ページ

https://turn-land-program.com/case_post/25nishiogifureainoie_2024/

● 本プロジェクト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/project_case25nishiogifureainoie_2024/

TURN LAND

はぁとぴあ原宿

太陽と、植物や石ころと、
これから出会う誰かと、
わたしたちと。

プロジェクト名

バナナと太陽のまわりを歩む

参画施設・団体

渋谷区障害者福祉センター　はぁとぴあ原宿

はぁとぴあ原宿は、施設入所支援、生活介護（通所）、短期入所、日中一時支援、児童発達支援などの支援を提供する渋谷区の中核となる障害児者支援施設。生活介護事業では、障害者アート活動への積極的参加と、理学・音楽療法などのリハビリテーション支援に取り組んでいる。また感覚統合とソーシャルスキル訓練を柱とした児童発達支援も行っている。

プロジェクトメンバー

永岡 大輔（アーティスト）
岩田 とも子（アーティスト）
頓所 武士（はぁとぴあ原宿 職員）
清田 貴史（はぁとぴあ原宿 職員）
TURN LAND プログラム 事務局

アーティストプロフィール

永岡 大輔
Daisuke Nagaoka

横浜と山形を拠点に活動するアーティスト。記憶と身体との関係性を見つめながら、実験的なドローイング作品などを制作。2016年よりTURN事業に参加し、はぁとぴあ原宿では2019年10月から交流を重ね、2022年からはプロジェクト《原宿荒野》を始動。「自生」や「変容」をテーマに植物が根を伸ばし、葉を茂らせるような活動となるようディレクションしている。

岩田 とも子
Tomoko Iwata

地面や太陽といった誰にとっても身近でありながら宇宙的なサイクルを想像させる事象に注目し制作を続けるアーティスト。自然観察・採集を活動に取り入れ、そこで出会った自然物に対する素朴な視点、そこからはじまる学びと表現を大切にしている。

いつもプロジェクトに参加してくれる利用者がバンドメンバーのようにいるのがこのプロジェクトの特徴でもある。一人は視覚に障害があり、いつもキーボードで歌を歌って参加してくれる。

プロジェクトのねらい

1 屋上で太陽の周りを歩んでいることをみんなで感じたい。

2 屋上で誰かのために旗を振りたい。

「屋上で暑過ぎないかな？／寒過ぎないかな？」「どんどん大きくなってるね」「このバナナ、実が成るかなぁ？」バナナがあると、施設の職員も利用者も自然とバナナに想いを馳せる。時間の刻みが速い都会の中で自然が持っている時のテンポに身を委ねるようなひと時に、アーティストたちは誘おうとする。「誕生日って太陽の周りをぐるっと一周まわるとまたやってくるんだよ」「あなたの誕生日は半年後だから今見えている太陽のちょうど裏側だね」屋上に集い、利用者たちと一緒にイマジネーションを共有する。寒い日も、暑い日も、歩（あゆみ）工房のメンバー（利用者）たちは近所の公園までの道のりをみんなで歩く。毎日それを繰り返す。私たちもいつの間にか太陽の周りを毎年繰り返し回っている。自覚するしないに関わらず、誰かが自分の歩むペースをつくってくれていることに気づく体験。はぁとぴあの利用者たちの独特のリズムに私たちは身を委ね、彼らもまた私たちに合わせようとしてくれる。時にみんなで太陽やバナナに身を委ねて、途方に暮れてみたり。そんな経験を共にしながら築いた関係は集うだけで緩やかな安堵感を与え合うようになった。

PROCESS | 永岡大輔

2024
6/14 顔合わせ・企画会議 | 7/1 | 7/31 利用者と応援の手紙を書く練習 | 12/4, 5 | 12

7/1
展示作業
「告白の絵（うた）」と題して「似顔絵」を展示

これまで利用者たちと描き溜めた「似顔絵」を施設内の廊下に展示した。「似顔絵」は、利用者が向かい合って座った人に向けて描きメッセージを添えたものだ。ただし、そのことが丁寧に伝わらないと、利用者の個人的な「告白」ともとれる作品の展示にネガティブな感情を抱く人もいるのではないかとの意見が職員たちから上がる。そのような懸念を直接話し合える関係性になったことを含めてありがたく受け止めた。

展示作業は永岡と職員との協働で進めた。

通りすがりの職員たちが絵の前で議論し始めた時の様子。

12/4 12/5
準備作業
バナナの葉で旗をつくる

暑い夏の間にぐんぐん育ったバナナの木は大きな葉を茂らせた。空が高く都会の景色が広がる屋上で旗を振りたい。そんな思いがはぁとぴあ原宿に通い始めた頃から永岡にはあった。そしてその想いを職員たちも叶えたかった。誰かを想って旗を振るイメージを実現したかったため、旗にメッセージを書くことにした。

メッセージを書く時に、バナナの葉が裂けないように糊などを塗って補強した。

屋上に集まり準備を進める永岡と職員たち。

12/12
本番・振り返り
バナナにエールを送る

永岡は、利用者たちとバナナの葉に応援メッセージを書き、来年実をつけるようにプロジェクトメンバーみんなでバナナの木にエールを送った。

永岡と一緒にバナナの葉にメッセージを書く利用者たち。

キーボードでBGMを演奏しながら場を盛り上げる利用者と、メッセージを書いたバナナの葉を持ちそれを見守る利用者たち。

2024
6/7, 14 顔合わせ・企画会議 | 9/24 | 10/15 | 10/19 はぁとぴあ祭 | 12/12

9/24

プレゼンテーション

利用者たちに参加してもらうための工夫を職員と考える

岩田は自作のワークシートを職員に配布し参加を依頼した。「大きなルーティンと小さなルーティン」と題し、誕生日を教えてもらい、印刷された丸を自由に塗りつぶしてもらった。丸が小さすぎると利用者が掴みづらいことや、色を塗る作業が難しい人もいるため、何かを選んで貼る程度の内容が良いのではないかとの意見をもらった。さらに、参考として普段の作業で使用している道具を職員の一人が持ってきてくれた。

職員たちの会議で考案した参加型のアートワークについて説明する岩田。

岩田は普段利用者たちが使用しているスタンプを試し、握れる大きさや参加可能な動きについてあらためて検討することにした。

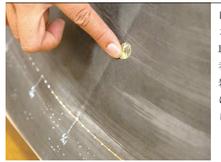
10/15

準備とリハーサル

はぁとぴあ祭での実施に向けて

岩田は宇宙のように黒い絵画のようなものと、屋上の地面の写真や歩工房のメンバー〈利用者〉と歩いた時の草木などの写真を印刷した紙をつくってきた。それらの写真の中から好きなものを選んで切り抜き、自分の誕生日のところにそれを貼ると、みんなの誕生日の印が惑星のように散りばめられた作品が完成する。

みんなで協力して岩田がつくった366日分の印が刻まれた絵を木製パネルに貼る。



自分の誕生日の日付のラインに切り抜いた丸を貼る。職員との相談を経て、利用者も作業しやすいように、岩田が用意した写真を穴あけパンチでくりぬくことにした。

12/12

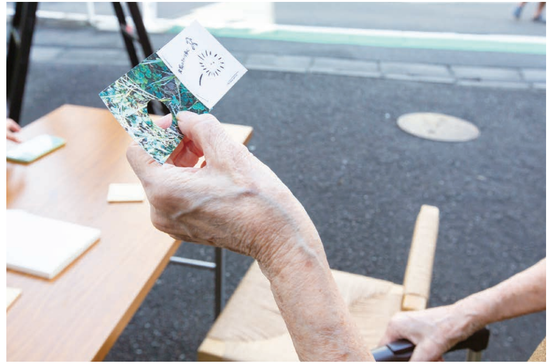
本番・振り返り

利用者だけでなく一般の方も参加

写真をパンチで切り抜き丸い方を黒い画面に貼っていく。自分の誕生日と誰かの誕生日が近かったり遠かったりすることや中央に太陽が描かれているので太陽の周りを一周巡ると誕生日が来ることが実感できる。参加者には誕生日のエピソードをノートに書いてもらった。利用者の家族がそのエピソードトークで盛り上がったり、誰にも気づかれないようにこっそり書き込む人がいたり、参加者たちは思い思いにその場を楽しんだ。

説明する岩田とどこに貼ろうか迷う参加者。

誕生日の思い出を、自分で書こうと張り切る幼い参加者。



参加者は切り抜いた後の写真を記念に持ち帰る。

視覚に障害のある利用者と音楽と音声でコミュニケーションする永岡（写真左）。

活動を振り返って

バナナにエールを送った後、みんなの誕生日が記された作品を太陽に見せているところ。

作品の画面を寝かせると、誕生日のところに貼りつけた地面の写真が存在感を増した。画面を絵画のように壁に立てかけていた時よりも、書道をするときのように寝かした方が墨の拡がりも伸びやかに感じられた。バナナの葉を頭上に掲げたとき、葉の重さを感じ自分がバナナになったような気分になったことも、でき上がった黒い画面の作品を屋上に持っていき太陽に見せたときに「あぁ、これで良かったんだ」となんとなくみんなで全てのプロセスが腑に落ちたような感覚があったことも、答えのないアートプロジェクトならではの、想像以上の到達地点に辿り着ける醍醐味だったように思う。

メンバーコメント

永岡 大輔（アーティスト）

日常と少し違う感情が湧き上がるような機会は、どうやったらつくれるんだろうというのをずっと考えてきました。僕らはものごとを考えたり想像したりするけれど、それより先にある感情が思考やイメージをつくったりするので、そういったいつもどこかで影響を受けてしまう感情とどうやったら違うモードで出会いなおせるか、見つけられるかがプロジェクトをするときに大事だと思っています。
感情と出会いなおすための目印がこのプロジェクトではバナナの木でした。バナナの木を見上げた時の感情や、人がちょっとずつバナナのことを考えたり、バナナを持っている未来の自分のことを考えたり。そうすることが何となくすごくいいことな気がして、それが人が一緒にいる理由にもなると思いました。身近にない「バナナの木」というよく分からないものをみんなで認識し合えたことが、何よりも大事なことでした。それができたのは、はぁとぴあ原宿の清田さんや頓所さんが一緒にバナナの木を見守ってくれたからだと思います。
岩田さんのプロジェクトとの共通点として、どっちも太陽だのみなところもおもしろいと思いました。自分たちで何かやっているようで、太陽に助けてもらっていて、人間同士だけじゃないつながりも感じることができました。

岩田 とも子（アーティスト）

施設に通った回数はそれほどでもないのですが、これだけ長い時間のなかで関われたのは初めての経験でした。利用者との交流を通じて、「歩く」とか、「ルーティン」とか、自分の中の興味とリンクしていく部分が結構ありました。それをどうやってアウトプットするか最後の方で悩みましたが、職員会議のときにお話をきいて、スッとこうすればいいんだと気づきがありました。職員さんの言葉によって、やりたいことに近づけたと思います。

頓所 武士（はぁとぴあ原宿 職員）

2023年度まで永岡さんと取り組んでいた「似顔絵」のプロジェクトが終わった後に、旗をつくろうという話はずっと挙がっていて、それが今回念願かなってようやくできました。ほかの素材でつくろうという話もありましたが、最終的にバナナの葉っぱでステキなものができてよかったと思います。プロジェクトに参加した3人の利用者もすごく喜んでいました。3人にとって永岡さんは特別な存在になっています。情緒が安定して過ごせるのではないか、そしてこのプロジェクトでさまざまな人と交流を楽しめるのではないかと思いました。

清田 貴史（はぁとぴあ原宿 職員）

原宿という環境にいるとなかなか自然を感じる機会が少ないので、施設ではアートや創作の方に意識が行きがちでしたが、永岡さんとの活動は今までにない視点をくれました。最初は何をやっていくのかな？という感じでしたが、後半はこんなふうになっていくんだ！と想像を超える展開でした。利用者にも最初は無理しなくていいんですよと声をかけていましたが、利用者も楽しんでいる様子で、活動に対する期待感を感じました。
岩田さんのプロジェクトも、太陽という大きなスケールの切り口で、普段考えないことを考えさせてくれて楽しく活動できたと思います。

藤井 理花（当日スタッフ）

一つ一つはささやかな試みだとしても、こうしたプロジェクトを継続していくことで、より多くの社会における多様な人たちの存在や声が可視化されていくことが大事だと思いました。また、アート的な思考を取り入れることで、職員や利用者ほか、立場を超えて自然に交流が生まれ、つながり合う場が創出できると思います。

今回のプロジェクトでは、利用者と職員、ご家族など普段一緒に過ごしている人同士でも、お互いにそれまで知らなかった一面を発見する機会になったり、アートを通じて、その人の人生について少しでも想いを馳せる時間になることで、ケアの在り方や世界の見方がより深まっていくのではないかと思いました。アーティストやスタッフにとっても学びの機会になると思います。

事務局コメント

TURN LANDとしてプロジェクトがスタートした2022年度は、利用者向けにアートプログラムを実施することから始めた。担当職員とアーティストとの協働関係も充実していき、少しずつ担当職員以外の職員にも協力を依頼していった。また、利用者の家族が多く訪れる「はぁとぴあ祭」などではバザーに出店しているほかの施設の人々とも関わる貴重な機会となっていた。ただ、原宿のキャットストリートに位置することもあり、なかなか地域との連携が進められない歯痒さもあった。そんななか、屋上の夏の日差しはまさに大自然そのもので、このプロジェクトで設置した小屋は紫外線でみるみるうちに朽ちていった。一方で、バナナを育て始めると案外原宿にはほかにもバナナが植わっていることに気づいたり、3年目となる今年度は建物の前でプログラムを実施してみたら、何か面白いことを期待しながら眺める外国人観光客も「アート」への関心を示し協力してくれる存在だったことに気づかされた。そんなことをしながら都会の奥の深さにアーティストや事務局のメンバーが圧倒されている間に、担当職員の二人は以前よりも一歩踏み込む形で施設での実装を調整する力をつけていた。同僚職員たちへの協力の呼びかけや、行事でのプログラム実施についての調整、施設での準備や物品の保管など、アーティストたちの言葉や手法を理解した上での協力体制の構築だった。その状況は、アーティストを芯から励ましていたように思う。アーティストの話す言葉に翻弄されすぎず多様な手法の一つ一つの魅力の部分と運営の段取りを押さえることの重要性をあらためて認識する機会となった。

「バナナの旗」を展示した時の記念写真。

このプロジェクトに関する詳しい情報はこちら

● 本プロジェクト紹介ページ

https://turn-land-program.com/case_post/26heartpia_2024/

● 本プロジェクト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/project_case26heartpia_2024/

TURN LAND

さくらんぼ

言葉以上に語る身体を見つめて。

プロジェクト名

人と人の間にあるもの

参画施設・団体

豊島区立心身障害者福祉ホームさくらんぼ

さくらんぼは、豊島区在住の心身障害のある方が保護者の死亡・高齢化・疾病などの理由で、就労または福祉作業所等への通所が困難となった場合に、住み慣れた地域で生活ができるよう、自立助長のための日常生活の援護、支援を行う施設。

プロジェクトメンバー

アオキ 裕キ（新人Hソケリッサ！ 代表、ダンサー）

工藤 かおる（さくらんぼ 施設長）

杉田 雪絵（さくらんぼ 職員）

柴田 夏実（さくらんぼ 職員）

高取 さくら（さくらんぼ 職員）

TURN LANDプログラム 事務局

アーティストプロフィール

アオキ 裕キ

Yuuki Aoki

「日々生きることに向き合う身体」を求め2005年より路上生活経験者を集めダンスグループ「新人Hソケリッサ！」を開始。近年では2017–2018東京近郊の屋外全13カ所にわたるパフォーマンス「日々荒野」ツアー、続いて2021–2022「路上の身体祭典H！」新人Hソケリッサ！横浜東京路上ダンスツアーを開催、屋外を中心に芸術に触れる機会のない方へ向けたパフォーマンスツアーを実施。ブラジル、リオ五輪プログラム、セレブラ「With one voice」等でも活躍。海外での評価も高い。活動を追ったドキュメンタリー映画「ダンシング・ホームレス」が2020年に公開された。

photo: 岡本千尋

中央にアオキを囲む職員とTURN LANDプログラムの事務局メンバー。

プロジェクトのねらい

1 利用者の日常にアーティストが身をおいてみてほしい。

2 利用者たちとの関係性の中で作品をつくってみたい。

アオキは利用者たちの日常に身体を馴染ませるように施設に通った。言葉は多く語らず、利用者たちの身体やそれを取り巻く環境を丁寧に観察する。言葉でのコミュニケーションが少ない利用者たちも、散歩やカラオケ、食事の時間を共にし、その隙間で自作の絵などをアオキに見せて互いの距離を詰めていった。アオキは利用者が描いた絵や利用者同士の距離感、歩いたり座ったりするときの位置などに注目しながら動画を撮影した。それらは一曲の歌と共に編集され、彼らの言葉なきコミュニケーションやそれぞれの身体が持つテンポ、そして何気ない日常のありようを祝福するかのような映像作品が完成した。身体に話しかけるのが得意なアオキは時折不意に踊りに誘う。向き合い、身体を動かしながら呼応するように即興の踊りを楽しんだ。映像作品にはその様子もしっかりと収められている。

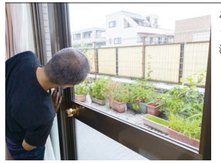
PROCESS

2024
5/31, 6/9 顔合わせ | 7/12, 8/9 | 9/1, 29 | 11/17, 12/8 | 10 振り返り

7/12 8/9
企画会議と施設見学
施設の現状共有とプロジェクトの方向性を検討する

アーティストと施設担当職員との企画会議を対面とオンラインの両方で行った。あらためて昨年度の活動についての振り返りをし、互いのモチベーションについて話し合った。アオキがイベントのゲストではなく、利用者の生活に同居させてもらうような時間をつくることになった。

企画会議の様子。施設長も同席した。



あらためて施設を巡り、ベランダの菜園の様子を興味深そうに眺めるアオキ。

9/1 9/29
施設滞在
利用者の日常に飛び込み共に過ごす

アーティストが施設滞在し、施設の日常的な生活を共に体験しながら利用者と交流した。

散歩に同行。雨宿りをしながら会話する様子。

毎回同じ席に座り食事をするアオキ。利用者とパーテーション越しに向き合い、互いに様子を伺う。回を重ねるごとに慣れていく様子を観察した。

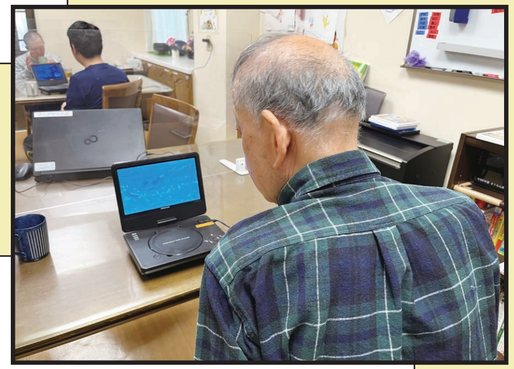
11/17 12/8
映像上映
利用者たちとの交流と関係性を通じた作品制作

アオキが施設滞在するなかで見つけた利用者の絵や撮影した風景を編集して映像作品を制作。登場する利用者たちに試作を見せ反応を見たり、追加で撮影に出かけたりしながらようやく完成した映像には利用者たちとのカラオケの思い出や一緒に踊った日の様子も収められていた。何気なく並んで立つ距離感に見る利用者同士の関係性やキャラクターがとても愛らしく表現されていた。

試作を利用者に見せた日。未撮影の箇所は、アオキが描いたイラストが差し込まれていた。利用者たちが何気なくベンチに座る風景。

食堂のモニターにアオキがつくった映像を流し鑑賞する。

活動を振り返って



利用者たちが棚からDVDを選んでそれぞれの再生機で映像を見ている普段の様子。

自分も写った映像を眺める利用者。

DVDを再生し、画面を見るでもなく身体を揺らして過ごす利用者の様子をアオキは見ていた。利用者たちが登場する映像作品をつくったら、好んで見てくれるのではないか？そんな期待から、アオキは利用者が好きな歌に乗せて映像作品をつくった。

メンバーコメント

アオキ 裕キ（アーティスト）

利用者のUさんの「間」や人との距離感に発見がありました。どこかで自分も自分のテンポだったり距離感で人と接しようとしていたけれど、それは必ずしも正しい距離間ではないのではないかと感じました。利用者の方たちは普段、自分に心地よく過ごしていると思うので、そういう時間の使い方とか距離の取り方とか、忙しい現代にちょっとかけているものを感じさせてくれました。だからあえて何かしようとするのではなく、利用者の方たちとの微妙な時間の流れを体感しました。いろいろやることはできたけれど、これはこのまま過ごすことが大事だと感じました。次第に距離感が縮まっていくのかどうか分からなかったけれど、最終的には二人で踊れたし、その時にはもしかしたら我々だけの何かがあったかもしれないと感じています。

工藤 かおる（さくらんぼ 施設長）

利用者は、ご家族が撮った写真を見ることがあっても、映像で動いている自分の姿を見ることは普段の生活の中であまりないと思います。今回のアオキさんが制作した映像を見ることで、映画の主人公になったような印象を受けたと思います。ご家族も喜ぶと思うので、見せてあげたいと思います。

柴田 夏実（さくらんぼ 職員）

毎回TURN LANDの方が来るときに、今日アオキさんたち来ますよと利用者の皆さんに話していて、最初はあれ誰だっけ？みたいな表情でしたが、後半になるにつれて、また来るのねという感じの反応になっていきました。距離感が次第に縮まっている感覚がありました。私はアオキさんと利用者のUさんが二人で昼食を食べている様子が印象に残っています。

高取 さくら（さくらんぼ 職員）

今年度はなかなか現場に立ち会えませんでしたが、記録写真を見ただけでも、アオキさんの存在がさくらんぼの日常に溶け込んでいる感じがしました。昨年度の活動もよかったですが、今年度は利用者の人々も自然な感じで楽しんでいてよかったと思います。

杉田 雪絵（さくらんぼ 職員）

アオキさんが、さくらんぼの利用者さんの持っている「間」や利用者さんと職員との関係性・距離感に着目してくださったことが印象に残っています。さくらんぼの日常に触れていただけてよかったです。昨年度の活動を踏まえて、今年度の活動をつくり上げることができたことが今回の成果だと思います。

事務局コメント

職員たちが創作プロセスに立ち会ったことで、アオキの独特な視点を感覚的に共有していたように思う。その視点は身体の表現するさまざまなメッセージを受け取っては返すという普段とは異なるコミュニケーションで、言葉でのコミュニケーションが得意でない利用者と関われる新たな手法でもあることがとても重要なことに感じた。また、数年で入れ替わる利用者たちとの交流の場面に立ち会えたことで、さまざまな理由でその場に居れたり居れなかったりするということの切なさやその場にいるメンバーが集う貴重さを垣間見て、私たちも利用者同士の関係に目をむける新鮮な機会になった。

映像作品のためにアオキが描いたイラスト。

このプロジェクトに関する詳しい情報はこちら

● 本プロジェクト紹介ページ

https://turn-land-program.com/case_post/27sakuranbo_2024/

● 本プロジェクト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/project_case27sakuranbo_2024/

TURN LAND

フェイト

想像を超える存在を
歓迎する場所を
地域に。

プロジェクト名

オーロラ・フロアプロジェクト

参画施設・団体

フェイト

フェイトは、杉並区にある放課後等デイサービス。こどもたちのありのままを受け入れ、それぞれのこどもの学習進度、学力に合わせた学習支援や、同じような課題を抱えているこどもたちが、楽しく一緒に活動できる居場所づくりを行っている。

プロジェクトメンバー

大黒 健嗣（プロジェクトアーティスト）
目黒 英之（フェイト 職員）
髙井 功一（フェイト 職員）
岸 雅博（フェイト 職員）
松岡 知里（フェイト 職員）
TURN LANDプログラム 事務局

アーティストプロフィール

大黒 健嗣
Kenji Daikoku

現代の都市を舞台にしたアートプロジェクトを通じて、あたらしい価値観やライフスタイルを提案し実践するアートプロデューサー。ギャラリー“高円寺AMPcafe”にはじまり、アートホテルプロジェクト「BnAhotel」（東京、京都など4拠点で展開）や壁画（MURAL）を描くプロジェクト（高円寺、虎ノ門、中野）などを展開。「我々は宇宙人だ」という客観的事実をいかに日常的な感覚に落とし込めるかを全ての活動のテーマとしている。

フェイトの職員たち。

プロジェクトのねらい

1 “宇宙人が当たり前にいるほどの未来を想定し、想像を超える多様な生物が行き交う「宇宙港」にあるダンスフロア”の実現に向けた一歩をみんなで踏み出したい。

2 利用者が創造性を発揮できたり、地域に気兼ねなく出入りできたりする場所をつくりたい。

フェイトのこども達のための企画として実施するのではなく、彼らが来ても楽しめたり歓迎できる状態のプログラムを地域の中につくることを目指した。大黒はフェイトの利用者の“音楽がかかれば踊る”素直な身体に惹かれ、彼らが当たり前にいるダンスフロアを地域につくることを目標にプロジェクトを始動させた。重要なことは、障害のある方と普段関わることのない地域の大人たちが、フェイトのこどもたちを思って着用時に負担の少ない衣装を考え、未来のダンスフロアを想像しかたちにしていくこと。また、「魅力的な社会」をつくる一員になること。地域の大人が変われば フェイトを卒業した後の利用者たちにとっても生きやすい社会がつくれるはずだ。身体の持つ見た目や能力を超えて、目に見えない内発的なエネルギーによるコミュニケーションや人間が本来持っているけれど使うことのなかった力に目を向けようとする時間を「大黒さんの手伝い」という建前で参加者が獲得する貴重な機会となっている。

PROCESS

2024

- 5/28, 6/11 顔合わせ
- 27, 7/1
- 8/10
- 10/9 企画会議
- 10, 24 衣装づくりワークショップ
- 28 施設訪問・交流
- 30, 31, 11/1 衣装づくりワークショップ
- 11/4 高円寺のレンタルスペースで衣装制作とダンスフロアイベントの実施
- 14 施設訪問・見学
- 21 衣装づくりワークショップ
- 12/5
- 13 振り返り

6/27 7/1

企画会議

施設の日常をリサーチして気づきを企画に活かす

3年目となりアーティストと施設担当職員が意見を言い合える関係になってきた。大黒は、職員からこどもたち一人一人により深く介入して関係を築くことを勧められ、障害特性などの専門的な知識を共有した上で昨年度よりも頻繁に施設に通うことにした。

企画会議の様子。互いの近況や関心を共有し、活動のイメージを具体化していった。

施設滞在の様子。利用者と交流するなかでの気づきがアイデアに直結していく。

8/10

おしゃれパーティー24オーロラフロア会議開催

地域に少しずつ仲間を増やしていく

施設外での集会も頻度を増やし、メッセージングアプリなども活用して、少しずつプロジェクトメンバーを増やしていった。フェイトには一般参加者を多数呼べるほどの空間がないため、施設外の集いと連携がこのプロジェクトを動かしていく。

大黒がプロデュースしたアートホテルのロビーで未来のダンスフロアを想像するワークショップ。

誰もが気軽に参加できる衣装のつくり方を探った。

12/5

本番実施

宇宙人も参加できるくらい
インクルーシブな場を目指して

フェイトでダンスフロアプログラムを実施。会場には衣装を吊り下げ、自由に手に取れるアイテムも昨年度より利用者が扱いやすいよう工夫を凝らした。

真っ先に着替えてプログラムが終わるまでずっと踊ってる子もいた。苦手な音の時には逃げられるようにするなど職員との連携で様々な関わり方ができる場になっていた。

衣装があることで大人もこどもも関わり易くなっていた。暗いエリアと明るいエリアをつくりフロアから離れて読められる場も用意した。こどもたちは初めて聴く曲でも大いに盛り上がっていた。

活動を振り返って

地域の古民家を借りての本番。カーブミラーに姿を映し踊った。

利用者が衣装づくりを職員と一緒に楽しむ様子。

利用者が施設を離れて別の会場に訪れ、衣装づくりからダンスフロアタイムまで楽しんでくれたことはプロジェクトメンバーの自信につながった。

メンバーコメント

大黒 健嗣（アーティスト）

オーロラフロアを理解して積極的に協力する地域のコミュニティメンバーが増えたことや、施設のこどもたちが向こうから自然にコミュニケーションしてくれるようになったことが印象に残っています。プロジェクトも3年目を迎え、関係者の数や濃さ・アウトプットの進化など継続による成長が各所に見られました。地域のメンバーが、取組を通じて、生活圏内にフェイトがあり、こどもたちがいることが実体験で知れたことや、アーティストと施設担当者だけでなく、周辺住民と職員さんの間にも交流が生まれたことが今回の成果だと思います。今回を通じて、独自にプロジェクトコミュニティを育てる方法を確立できた気がします。フェイトに限らず街なかで企画を展開し、フェイトのこどもたちをゲストとして招待するかたちを定着させていきたいです。

目黒 英之（フェイト 職員）

今回も大黒さんをはじめさまざまなアーティストの皆さんにご協力いただいてとても楽しいイベントがつくれたと思います。いつも驚かされるのは、こどもたちの順応性です。障害の特性でもあるのですが、大きな音や暗いところが苦手なこどもが結構います。ところが音楽がかかり、周りの大人たちが楽しんでいるのを見ることで「楽しい場所」と思ってくれるようです。自然と身体をリズムに任せる子や、少し離れたところでみんなが踊っているところを楽しそうに眺めているこどもなどこちらが驚くような反応を見せてくれました。私たちもまだ見たことのないこどもたちの姿を見られる可能性を感じています。

岸 雅博（フェイト 職員）

3年間TURN LANDプラグラムに関わることで少しずつ見えてきたこどもたちの成長に嬉しくなりました。3年目に初めて参加したアンジェルマン症候群のこどもも、普段は被り物を嫌う特性を持っていますが、施設外の会場でのプログラムでコミュニティメンバーの方によって装飾された衣装を気に入ったのか、着続けていたことも印象深かったです。

松岡 知里（フェイト 職員）

今年度からフェイトで働き始め、このプログラムに参加してみて、非日常的な空間で楽しんでいたり、恥ずかしがっていたり、普段なかなか見られないいろいろなこどもたちの側面を見られたことがとても新鮮でした。

原 順子（地域のプロジェクトメンバー）

こどもたちが楽しそうに踊ったり、DJブースを覗き込んだり、自由に振る舞っているのがとても良かったです。参加した大人も、その空間を楽しんでいたと思います。一緒に踊ったり、手をつないだりできたのは癒やしになりました。
任意で集まって衣装製作をしている時に、手を動かしながらおしゃべりしていると不思議に穏やかな空気になり、イベントに至る過程も重要でした。さまざまなつながりが可視化されてきたことが、今回の成果だったのではないかと思います。誰でもという訳にはいかないとは思いますが、誰もがクリエイティブになれる環境を提供する場になっていってほしいです。

御園 大貴（地域のプロジェクトメンバー）

DJとしてプロジェクトに参加しました。当日はあえてこども向けの曲はかけず、大人が楽しむものと同じようなダンスミュージックをかけたのですが、それでも彼ら彼女たちは音をそのまま受けとって自分で解釈して自由に楽しんでいました。僕たちと変わらないなと思いました。一般に障害があるといわれるこどもたちと自然でカジュアルに接する場をクリエイトしたことが成果だったと思います。地域社会にとって非常に公共的だと思います。

清水 詩央璃（地域のプロジェクトメンバー）

今回、初参加でしたが、初めてでも入っていけました。あまり意識せず、初めての人と挨拶をして、会場の準備をしている時、優しい雰囲気を感じました。印象に残っていることは、こどもたちがそれぞれ好きなことをしている風景です。本を持ちながら、みんなのところにまわって挨拶をするこどもや、端でおもちゃの野菜を切ってるこども。ダンスをしているこども。職員の方で、すっごくキレキレのダンスを踊っている方がいて、こっちまで元気をもらえました。だからこそ、それぞれで良いけど、ひとつの場所に集まることが大切だと感じました。身体を動かし、もっと地域の人（こどもから大人までみんな）と出会いたいな！と思いました。

事務局コメント

音楽がかかったら踊りたくなったり、気分が乗らない時は踊らなかったり、ごく当たり前のことなのだが、そういったことにあまりに素直に自然に体が反応する利用者たち彼らの魅力が3年目となった今年度もプロジェクトの中心にしっかりとあったことが、毎年同じダンスフロアプログラムを少しずつ理想的な形での開催に更新していけている要因のように思う。大黒は、自分が企画した本番の日よりも、フェイトを訪れ利用者たちと遊ぶ日を心の底から楽しみにしている。利用者たちの生きづらさや魅力を目の当たりにすることで、彼らが足を運びやすい状況の場を地域につくることが大黒の夢に重なっている。協力者たちは皆、それぞれに未来のダンスフロアの夢をみる練習をし、衣装づくりを通じて交流を重ねながらそれぞれの夢を大黒の夢と重ねていった。みんなで見る「夢」を丁寧に重ねる瞑想のワークなどのプロセスは特にユニークでオリジナリティあふれる手法を生み出していたと思う。この活動が地域に根付き、夢が現実になる日を私たちも楽しみにしている。

こどもたちが親しみやすいように丸みのある柔らかいイメージでつくった。

このプロジェクトに関する詳しい情報はこちら

● 本プロジェクト紹介ページ

https://turn-land-program.com/case_post/28fate_2024/

● 本プロジェクト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/project_case28fate_2024/

プレLAND

浅草みらいど

地域の人と協働する場を路上にひらく。

プロジェクト名

きむらとしろうじんじんの「野点（のだて）」

参画施設・団体

浅草みらいど

2021（令和3）年3月に浅草今戸に開所し、一働く一「就労継続支援B型ルーツ」、「就労継続支援B型ルーツ　おあしす」、一通う一「生活介護　ユニバース」、一住む一「共同生活援助（グループ ホーム）フォレスト」がある。就労継続支援B型の主たる事業所「ルーツ」では、敷地内に『-珈琲と焼き菓子- IRODORI café』を運営しており、ベーカリー部門・カフェ部門・受注作業部門があり、個性を互いに尊重し、常に新しく自由な創造をしながら、個々のペースでそれぞれ役割を持って地域社会へ参加できるようバックアップしている。

プロジェクトメンバー

きむらとしろうじんじん（アーティスト）

若山 萌恵（コーディネーター）

中本 祐介（浅草みらいど 管理者）

三宅 将太（浅草みらいど サービス管理責任者）

有田 知里（浅草みらいど 職員）

TURN LANDプログラム 事務局

アーティストプロフィール

きむらとしろうじんじん

Kimura Toshiro Jinjin

1995年から独自の「野点」を全国各地で開催。路上や空き地などで通行人や見物人も含めた一期一会を生み出すアーティスト。ドラッグクイーンの出立ちで、参加者が素焼きの茶碗に絵付けをしその場で焼き上げられたお茶碗で一服できる移動式陶芸お抹茶屋台を展開する。本番の会場をみんなで選ぶ「お散歩会」や当日のボランティアスタッフたちに本番さながらに作業工程を確認する「体験説明会」など、本番までのプロセスにおける交流を積み重ねながらのびやかな風景を立ち上げる。

photo: Ayaka Umeda

一番背が高いのがじんじん、その周りに浅草みらいどの職員とTURN LANDプログラムの事務局。本番には地域の協力者も含め30人のボランティアスタッフが集結した。

プロジェクトのねらい

1 新たな仲間を迎えて「野点」を開催したい。

2 地域で利用者が活躍できる場をつくりたい。

右の写真は「野点」の本番当日のじんじんの登場シーン。浅草みらいどの利用者の一人が警備のため誘導棒を持って佇んでいる。その奥に七色の傘を広げ颯爽と歩いてくる真っ赤なワンピース姿のじんじんが写っている。彼はどんな気持ちでその姿を眺めていただろう。じんじんの「野点」には開催場所を検討する「お散歩会」や本番前に開催場所の近所を一軒一軒巡る「挨拶回り」、実際に使用するリヤカーやテントを張って当日の作業を確認する「体験説明会」などのプロセスがある。本番当日も早朝から夜中まで準備や片付けが必要になる。短時間であれば手伝いができる人、軽いものであれば運べる人、誰かと一緒であればなんでもできる人、さまざまな人が関われるようにたくさんのボランティアスタッフを集めた。会を重ねるごとに知った顔が増え、次第に助け合える関係ができていく。施設から徒歩圏内に思い出の場所ができ、馴染みの場所や顔が増えることの安心感はつくれそうでなかなかつくれない。

PROCESS

2024
5/30 顔合わせ | 6/17,20 企画会議 | 7/4, 5 | 8/11 | 12 | 10/10 利用者が公園にポスター貼り | 12 本番会場の清掃 | 13 企画会議 | 14 利用者とアーティストで本番会場にポスター貼り | 19 | 10/21, 12/23, 1/7 振り返り
2025

7/4 7/5

企画会議と施設での交流

アーティストが施設の日常をリサーチ

じんじんが施設見学をし、日中活動に混ざって利用者たちと交流をした。どのような形での協働が可能かを含め検討するにもまずは利用者と一緒に過ごす時間が必要だ。

職員とじんじんが活動方針について話し合う。

職員の足にテープを貼り、その上に落書きするじんじんと利用者。

8/11

参加者説明会実施

協働による相互理解とチームビルディング

地域の人に混ざって利用者と職員が「野点」の実施プロセスを体験した。世代も習慣も違う人々との協働の場は一人一人の自己紹介から始まり、率直な感想や疑問を投げかけられる関係になるまで時間をかけてゆっくりと出会う。

参加協力者募集の説明会でみらいどの利用者が発言している様子。

本番に向けて作業工程を確認する『体験説明会』。職員も利用者もボランティアスタッフと一緒に説明を聞く。

10/19

「野点」の実施

共に場をひらく

通りすがりの人を含むたくさんの参加者が一緒に「野点」の風景をつくり上げる。「何だかよく分からないけれど、いい雰囲気ね」そんな眼差しで地域の人が行き交っていた。

好きな形の素焼き茶碗を選び絵付けする参加者たち。

自分で絵付けした茶碗で、じんじんから入れてもらった抹茶を飲む。

活動を振り返って

「体験説明会」のポスターを掲示した時の様子。

利用者が制作したポスターの掲示と「てるてる坊主」を吊るしに野点の会場に出かけた時間が、アーティストにとっても利用者や職員にとっても記憶に残る大切な時間となった。自分が描いた絵が街に掲示されることで、利用者にとっても自信や誇りにつながったようだ。

利用者が描いたじんじんのポスター。

じんじんがみらいどの利用者とポスターを貼る。

利用者とじんじんがポスターを貼りに向かう。

メンバーコメント

きむらとしろうじんじん（アーティスト）

プロジェクトの最初に施設を訪問し、利用者や職員の皆さんと交流した時間はとても印象に残っていますし、重要な経験でした。利用者の皆さんと玉姫稲荷神社までポスターを貼りに行った時はとっても嬉しかった。「一緒に路上に立つ」ことが少しできた気がします。ほんまは定期的にみんなで街をお散歩しながら絵を掛け替えに行くようなこともできたらいいなぁ。さらに言えば、絵やポスターの横には縁側のような広いベンチがあって、立ち寄った人が誰でもお茶を飲んで一服できて、もちろんその縁側もみんなでつくって・・・そんな場所・作業・風景が地域の中に点在している状態を夢見ています。今年度の成果は？と問われると、言葉にするのが難しいですね。「アーティスト」「利用者」「施設職員」・・・ある「立場」における「成果」を性急に言語化したり担保したりすることはなんとかして回避したい。今年度のみらいどさんとの関係に関しては「出会いそのものが成果である」という位置づけから考え始め、考え続けたいと思っています。
「野点」をはじめ、僕たちが路上で展開している現場は「立場や名付けという前置き」無しの出会いを求めている場で、たとえ1日であれ、なんとかそんな風景を具体的に存在させようとしている場。でも同時に、今回みらいどの皆さんと「一緒に路上に立ちたい」と感じ、実際に作業を共にした時間は、TURN LANDプログラムを通して「施設」「利用者」「職員」の皆さんと出会わなければ起こらなかったこと。そういう意味では「名付けや立場」と「その枠を超えて出会い・場を共にしたいという思い」は入れ子になりまじり合っている。多分それをご縁と言うのでしょう。純粋に立場も名付けも関係ない出会い（多分そんなものはない）を求めながら、それでも僕らは「全てをひっくるめて」出会い続ける。「存在そのものに価値があり」「出会いそのものに価値がある」その感覚を根底に置いて、続けていきたいです。

三宅 将太（浅草みらいど サービス管理責任者）

みらいどのスペースをつくってもらえたことで、利用者さんたちもゆっくりと休憩しながら、参加者の皆さんと交流することができました。来年は地域の方とも、もう少し交流ができたらいいかなと考えています。たとえば、せっかくパフォーマンスが得意な方もいるので、披露できる場があってもいいかなと思います。グループホームの利用者さんたちは、普段のイベントでは買い物に来る側になるので、一緒に作業をするというのは新鮮でした。今回の様子を見て、もっとがっつり当日スタッフとして参加できそうな感触を得ました。
また、実際に野点を見て、生活介護の現場の職員から野点のお茶碗を包む紙袋に絵を描いたらいいのでは、というアイデアが出てきました。現場を担当しているからこそ気づく点というのもあるなと実感しました。来年は、企画会議の段階から現場の職員に入ってもらえたらと考えています。

大和久 知紗（浅草みらいど 生活支援員）

利用者の皆さんは、イベントごとを普段から楽しみにしてくれていて、特に今回は、なかなかできない体験だったので、作業をしているときは、いきいきされていたかなと思います。本番の前の準備の時間では、ポスターを貼りに行く、という任された仕事もあって、よりやる気をもって散歩に出かけていました。
ご家族の方とは、普段送迎のちょっとしたタイミングくらいでしか直接コミュニケーションをとれなかったりするのですが、野点の日は、絵付けの場やお菓子スタンドを出してくださっていた方がいて、そこで休憩をしながらゆっくり話をすることもできて、私たちにとってもいい機会となっていました。

伊藤 悠平（浅草みらいど 生活支援員）

体験説明会に参加させていただき、本番に向けてプログラムの一連の流れを教わりながら、みらいどの利用者の皆さんと一緒に絵付け体験をさせていただきました。参加者の皆さんがイベントを盛り上げようという気持ちはもちろん、お互いに声を掛け合って助け合いながら取り組める環境や、主催者の皆さんの心遣いがとても素敵だと感じました。また、全体を通してじんじんさんの皆さんへの心遣いや気遣いがとても素敵でした。
「野点」を通じて、どんな些細なことでも質問する、お互いに声を掛け合って共有することはとても大事なことだと実感しました。職員や利用者さんに対してイベントスタッフ（ボランティアさんも含めて）の皆さんがとても温かく、丁寧に適切な声掛けをしてくださっていることがとても嬉しかったです。
今まで地域の皆さんとの関わりを持つ機会がなかったので、短い時間ではありましたが交流を持てたことは今後の関わりにもつながる良い機会になりました。今後、さらに地域の住民の方々と交流できる場として機能していってほしいです。皆さんの「声」を聞くことで求めていることに応えていけたらと思います。また、今後も利用者さんが自分から参加したいと思える場になってもらいたいです。
今回のプログラムでは、利用者さんがイベントスタッフの皆さんや地域の人々など、接したことがない人々に対しても戸惑うことなく参加されていることが多く、普段の生活では外部との関わりがない方も多いため、今後も積極的に参加することで社会参加への機会を増やしていけたら良いと思いました。

ボランティア（会社勤務）

一つのことに一緒に取り組むことで、性別、年齢、立場、障害あるなしなど…全く気にせず、一緒に楽しさを分かち合えて、とても良い経験ができました。立場諸々に関係無く、一緒に同じことに取り組むことで団結力が生まれ、一緒に楽しさ喜びを分かち合えるというのはとても良い経験だと思います。

渡邉 彩加（ボランティア・学生）

当日は夜から現場に入ったところ、説明会の時よりもスタッフ同士の信頼度が高まり、あたたかい雰囲気になっていた印象でした。注意深くしなくてはいけない部分もあり張り詰めた空気になりかねない現場の中で、説明会の時からスタッフ同士で声を掛け合い、信頼し、お客さんのわくわくした気持ちをさらに高められるような場がつくれていたということは、成果と言っていいのではないかと思います。

細谷 富男（ボランティア・会社勤務）

常連さんとのやり取りなどをみると、地域に根差した風物詩のようなイベントになってきているなあと思いました。正直最初は、なぜここで陶芸なのかな？という部分はありましたが、毎年継続的に行っていくことでいろいろな方が参加しやすいイベントとして一つのきっかけになると感じました。また、地域在勤の社会人という立場ですが、あらためて地域コミュニティに対して十分に役割を果たせていないなと自覚しました。
台東区／荒川区周辺も、山谷地域と、それ以外で二極化している感じがありますが、無理に融合する必要はないとも思いつつ、互いに存在価値を認識し合える関係性になると良いと思っていて、このイベントがそのきっかけになればと思っています。

若山 萌恵（コーディネーター）

みらいどさんとの活動は、昨年度まで取り組んでいたほうらい地域包括支援センターとの活動を引き継ぐ形でスタートしました。
打ち合わせなどで少しずつ施設に通わせていただくなかで、職員さんと利用者さんのやりとりにとても心を惹かれていました。やりとりの間合いに思わず笑ってしまうような瞬間もたくさんあり、施設の日常の中で築いてこられた関係性の長さに思いを馳せました。
体験説明会は、じんじんさんの「野点」にこめられているこだわりと具体的な作業をじっくりと共有しながら、利用者さんが合いの手を入れる場面があったり、公園全体に散らばりながら各々の作業に集中したり、散歩途中に立ち寄った人と談笑する時間があったり…と、さまざまな瞬間がとろけるような一日になりました。

参加者が絵付けした焼く前の茶碗。

事務局コメント

このプロジェクトは、地域のボランティアスタッフがとても個性的だ。それぞれに地域の中で活動をしてきているしその歴史もあるなかで、この事業に関わっている。忙しい人が多い東京の中で、こんなにも多様な人々が集い、一人一人が濃密にややこしいことを考えている出来事は稀だと思う。それを可能にしているのが、じんじんの言う「路上」であり「野点」である。何もしなくてもすでに素敵な佇まいの素焼き茶碗が並び、そこに参加者たちが想いをあるだけ全部のせたような絵付けをしていく。いろいろな出来事が起きてはいるのだが兎も角もとっても綺麗なお茶碗が焼ける。その茶碗でゆっくりお茶を飲む。そのしっかりと流れる美しい時間の流れを軸として、そこに揺蕩う人々の景色がその全体の風景を豊かに演出する。朝から意気込んで準備を始め、昼頃からのんびり「野点」を味わい、夕暮れを堪能して終わり、夜遅くまで片付け作業に取り組む。その特別な1日をみんなで過ごす経験。そこにみらいどの利用者やほかの福祉事業所の関係者が交じり当たり前に参加していたことが、とても晴れがましかった。繰り返すほどに新しい出汁の「素」と出合える不思議な地域だと思う。

このプロジェクトに関する詳しい情報はこちら

● 本プロジェクト紹介ページ

https://turn-land-program.com/case_post/29asakusamiraido_2024/

● 本プロジェクト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/project_case29asakusamiraido_2024/

プレLAND

東京東浅草の家

みんなとつくる「今」、
その時を掴む歓び。

プロジェクト名

墨かけ

参画施設・団体

グループホーム東京東浅草の家

利用者の残存能力を引き出し、健康的な生活をおくりながら満足できる一日を過ごせることを理念とするグループホーム。明るい、家族的な雰囲気を大切にし、利用者との日々の対話や四季を感じられるレクリエーション、外出などの楽しみづくりなどにも力を入れている。

プロジェクトメンバー

大西 健太郎（アーティスト）

若山 萌恵（コーディネーター）

八木 実知雄（東京東浅草の家 館長）

TURN LAND プログラム 事務局

アーティストプロフィール

大西 健太郎
Kentaro Onishi

その場所・ひと・習慣の魅力を発掘し出会う過程を通じて「こころがおどる」風景を舞台にパフォーマンス作品を制作するアーティスト。2016年より板橋区立小茂根福祉園にて他者との共同創作によってつくり出す参加型パフォーマンス〈「お」ダンス プロジェクト〉を展開し、2018年南米エクアドルにて「TURN-LA TOLA」の参加アーティストとして、地域住民と共同パフォーマンス〈El Atabiro de La Tola〉の公演を行った。2020年「サインポエム」（手話をもとにした詩の朗読表現）を用いてオンライン上で制作する日本・エクアドル国際パフォーマンスプロジェクト〈サインシンフォニーシッチョイサー手が語る、サインが響く！静寂が奏でる狂騒の交響曲ー〉を公演するなど、自分とは異なる身体の特性を持った人々との交流に関心がある。

photo: Ayaka Umeda

左から若山、大西、八木、TURN LANDプログラムの事務局。

プロジェクトのねらい

1 認知症の方を含む利用者と今この瞬間の感動を分かち合いたい。

2 施設で普段はできない体験を利用者とアーティストと一緒につくりあげたい。

眼前に広がる模様の海。先の尖った筆に墨をつけてその水面を突く。すると模様がガラリと変わる。対面で交互に突き合ううちに、細やかな風や振動が模様を複雑にしていく。そんな変化をただ見つめる時間。美しい瞬間を目指して、無心になる。認知症の症状が重くても、目の前の状況には反応できる。即興で掛け合うこと。目の前の状況に反応し、自分の行動がその場に影響を残すこと。その積み重ねが、見たことのない風景と出会わせてくれる。その尊い「今」を瞬時に写し取り捕まえた時の感動は、もう失うことがないような安心感と共にやってくる。その場の状況と絡まりながら、身体によって孤立した「私」を超えて特別な風景の一部になる快感がそこにはあった。その場にいる人の気配や風と共に即興で踊るパフォーマンスを、アーティストと一緒につくり上げる過程は職員や利用者、誰にとっても初めての体験だった。「餅つき」のように掛け合いの中でつくり上げる間合いは懐かしく、一つ一つの作業は単純で職員もサポートしやすくデザインされていた。また、一つ一つの小道具が茶道具のように美しく並べられ、程よい緊張感と晴れやかさを醸し出し、利用者たちからは「粋だね〜」と声が上がった。

PROCESS

2024
6/4 顔合わせ | 22 企画会議 | 7/28, 8/25 | 10/5 企画会議 | 13, 19 交流 | 11/17 | 12/8 | 22 振り返り

7/28 8/25
墨流し染めの実施
協働の中から楽しみを見出す

水に墨を浮かべて水面の模様を写しとる「墨流し染め」を、1回目は和紙で、2回目は絹で実施した。利用者たちとの協働体験を軸に、素材や道具、プログラム内容を少しずつつくり変えながら回を重ねていった。

和紙に折り目をつけ、筆で濡らして切る様子。アイロンをかけるなど準備から一緒に行った。

大西がデモンストレーションする様子。利用者たちは向き合った相手と掛け合いで交互に白と黒の墨を水面に垂らし一つの作品を仕上げていく。

11/17
作品鑑賞会
楽しみをみんなで共有する

ペアになってつくった墨流し染めの作品を大西が額装し、その模様を蝋燭の灯りで鑑賞する機会を設けた。大西は最初に作者の名前を読みあげ包み紙を破いて見せた。大西のたっぷりと時間をかけて進む儀式のような作法に、利用者たちは「こんな晴れがましいことを」「有難や」と感謝の念を抱いたようだった。

名前を大きな声で読みあげる様子。

包み紙から顔を覗かせた模様はつくった時の印象とは異なり、新鮮なものとして目に飛び込んだ。

12/8
墨流し染めの実施
共に場をつくる

3回目の墨流し染めは青や黄など色とりどりの墨を加えて実施した。利用者も慣れた様子でリラックスして墨を差す仲間にコメントしたり風を送ったりと合いの手を入れながらみんなで掛け合いを楽しんだ。

黄色い水面を写し取った時の様子。職員も利用者もその一瞬の出来事に驚き歓声をあげた。

これまでの活動を記録した写真を興味津々な様子で眺める利用者たち。

活動を振り返って

街角で踊る大西（写真左）。
2023年度ほうらい地域包括支援センターとのTURN LANDプログラム。

墨流し染めの様子。ペアになった2人が墨と洗剤を差し合う姿をみんなで見守っていると、見守っていた利用者や職員が自然と合いの手を入れはじめ、布を染めるまでのプロセスを共に楽しむようになった。

振り返りの際、利用者の一人が「これまでの活動で一番印象的だったのは何といっても大西さんの路上での踊りね」と話し始めた。車の通る道路で見たことのない踊りを踊っていたことが頭から離れないそうだ。大西も、利用者から予想外の言葉が飛び出てきたことに驚いた。

メンバーコメント

大西 健太郎（アーティスト）

利用者の方の中には、言葉を話すことが困難な方もいらっしゃいます。しかし、言葉を話す前後には、気持ちが動いたり、感情と共に身体が動きます。それは、コミュニケーションの始まりでもあり、人と人の間に何らかのやり取りが生まれた瞬間でもあります。そのやり取りは特定の人と人の関係から、皆で会話の波を漕ぐみたいにさらに周囲の人へ波及していくこともあります。利用者の方とのやり取りでは、力んで伝えようとしたことより、気持ちにも余裕があってリラックスした状態であった時ほど受け取ってもらえた気がします。
活動を通じて、利用者や職員の方が活動中にお互いの表情や言葉の端々に反応し、個々人の心に生じた新鮮さや思いがけない出来事を言い表し、分かち合えたことがこのプロジェクトの成果だったと思います。

八木 実知雄（東京東浅草の家 館長）

施設では毎日同じことの繰り返しで刺激が足りないけれど、大西さんがいらっしゃって活動されると、利用者がいきいきするのでとても良いことだと思います。良い刺激になっていると思います。

東京東浅草の家 職員

普段関わらない利用者の方とも接する機会になり、「こういうことに興味があるんだ」と知れて勉強になりました。人それぞれ興味を示すことが全く違いますので、意外なところに興味を示されたときに、なかなか見せない顔だったり、急に真剣になったりして、こういうことは大事なことだと思います。

東京東浅草の家 利用者

素晴らしいと思います。何回も楽しませていただきました。普段、階の違う利用者の方とは会わないから、一緒にやって名前を覚えられました。ありがとうございました。

東京東浅草の家 利用者

みんなが集まって（プログラムを）やるとは思わなかったです。びっくりすることばかりでした。

若山 萌恵（コーディネーター）

東浅草の家とのご縁は、昨年度、ほうらい地域包括支援センターの職員の方がつないでくださいました。認知症という状態について理解を深めつつ、具体的にどんなことが一緒にできるのだろうか？という課題も感じました。
今年度のプログラムを提案してくれた時の大西さんの言葉が、今でも印象に残っています。
「墨の流し染めの紋様を写し取る瞬間は、踊りが『踊りだ！』ってなる瞬間と、すごく近い。言葉で『なぜいいか？』を説明できるようになる前に、『これだ！』と身体を動かして写し取らないと、形が変わっていってしまう。だから、認知の基本的なところで会話ができるような気がして」。
これまで、踊りを軸として活動を展開してきた大西さんならではの視点が込められていると思います。
館長の八木さんは提案をじっくりと聞いてくださり、限られた時間の中でも利用者さんたちがプログラムに参加できるように、毎回万全の状態を整えてくださいました。
膨大なケアワークに取り組む場である施設で、一人一人の「間」を待つための時間の感覚を共有することは、なかなか簡単なことではないと思います。時間を積み重ねて、職員さんや利用者さん個人と向き合えるようになってきて、だんだん独特の間合いが見えてきたような気がします。

事務局コメント

大西は浅草の地域リサーチをしながらプログラムを練った。「型」や「伝統技法」に目を向けた成果が、世代を超えて通ずる華々しさを生んでいたように思う。「間合い」の持つ落ち着きと抑揚が利用者たちの慎重さや歯痒さなどの間合いと響き合い、何をしているか分からなくなってもその失われた時間を「間」としてリズミカルに捉え直すような時間だった。

黒い紙を破って作品を鑑賞した時の様子。

このプロジェクトに関する詳しい情報はこちら

● 本プロジェクト紹介ページ

https://turn-land-program.com/case_post/30tokyohigashiasakusanoie_2024/

● 本プロジェクト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/project_case30tokyohigashiasakusanoie_2024/

プレLAND

翔和学園

ひらめきを持ち寄り、
共に創る喜び。

プロジェクト名

音楽つくりやさん

参画施設・団体

翔和学園

「人間の生きていく気力を育てる」ことを通して、社会で活躍できる力を育むことを目指した特別支援教育を行っている。小中学部・高等部、大学部、ワークセンター翔和、グループホーム翔和とそれぞれの段階で、「人間の生きていく気力を育てる」ことを通じて社会性を伸ばすことを目的にしている。
心理、医療、就労の専門家や保護者との連携により、学習場面や生活場面で困難を抱えるこどもの早期発見・療育から就労、そして自立までの一貫した支援の実現を目指す。

プロジェクトメンバー

井川 丹（作曲家）

田中 文久（作曲家・ソニフィケーションアーティスト・サウンドプログラマー）

中村 朋彦（翔和学園 カスタマーサービス担当）

水川 勝利（翔和学園 教員）

浅沼 香南（翔和学園 教員）

TURN LANDプログラム 事務局

アーティストプロフィール

井川 丹
Akashi Ikawa

「人の声」を創作の中心に据え、表現活動を行うアーティスト。演奏会用作品やサウンドインスタレーションの制作をはじめ、美術家、建築家、ダンサー、映像作家等との共同制作やパフォーマンスなど幅広い活動を展開する。近年はアートプロジェクトへの参加や、市民参加型ワークショップ、こども創作教室のプログラム開発等を通して、音を介した表現／コミュニケーションを拡張させ、そこに居合わせた人が多様な関わり方のできる場づくりを探求している

photo: Yuji Sakamoto

田中 文久
Fumihisa Tanaka

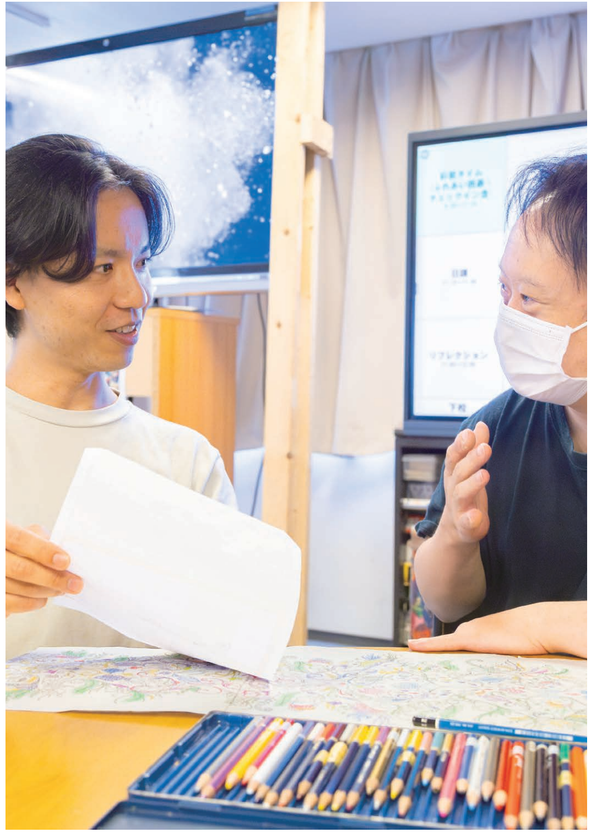
音楽に関するさまざまな技術やテクノロジーを駆使し、楽曲制作のみならず、空間へのアプローチや研究用途、最近では、あらゆるものを音に変換する「ソニフィケーション」を用いた制作・研究・開発等、音楽の新しい在り方を模索・提示している。教育アプリの制作や、映画やドラマ音楽の作曲なども手掛けている。

アーティスト二人を中央に囲んで学園の教員とTURN LANDプログラムの事務局メンバーの集合写真。就労の場と教育の場に仕切りがないことや卒業生が通い続けられる場になっていること、翔和学園が大切にしているたくさんのことを教えてもらいながら少しずつプロジェクトが動き出した。

プロジェクトのねらい

1 学生一人一人の関心事と共鳴できる場をつくりたい。

2 やりたいことを社会化していくアーティストたちと学生を出会わせたい。



教育の場と就労の場が交じり合う独特な状況の中で、自己実現や社会参加とは違った形で「人と関わること」の純粋な喜びを思い出させてくれる時間。「だから何？って言われたら、それまでなんだけどさ」と照れ笑いをしながら二人のアーティストは「でもこれってちょっとすごくない？」と真剣な顔で話しかけてきては、「ワクワクしてもいいんだよ」と言わんばかりの笑顔で気持ちを煽る。学生たちは「これでもいいのかな？」と勇気を出して二人に応え、二人はそれを全身で受け止める。美しい波動ってだけで十分素晴らしい。そこに自信がある音楽家の二人だからこそ、学生と共鳴する時間を堂々と価値化できる。誰かにテンポを合わせたり、コミュニケーションが取れているように見えるイメージ通りの「応答」でなくても、目の前のことにしっかり反応していて、相手にも配慮があり、一緒に何かをつくって喜びを分かち合えた。その経験は学生にとってだけではなく、アーティストにも、その場を支える教員たちにも自信になるような出来事だった。

PROCESS

2024
6/24 顔合わせ | 7/9, 30 | 9/9 交流 | 28 | 10/23, 11/21 企画会議 | 12/13 リハーサル | 16

7/9 7/30

企画会議・見学

アーティストが施設の日常に飛び込む

「ふれあい囲碁」や瞑想などを含む学生たちの習慣をまずは体験することから交流は始まった。学生一人一人がそれぞれ立てた目標やスケジュールで自由に研究をする「彩能タイム」では、けん玉や木工、似顔絵、塗り絵、双六、紙芝居、音楽、映画、スポーツ、社会問題などさまざまなテーマに取り組む学生と出会った。

学生一人一人と向き合い交流する田中。

教員との打ち合わせの様子。

9/28

彩展（学園イベント）を見学

学生たちとの関わり方を模索

年に2度ある学生たちの発表の場「彩展」では、学生一人一人が出店を持つような形で教室のあちこちで研究の成果がお披露目されていた。

就職活動に専念する学生の「模擬面接」に参加する井川。面接官となり質問をする。

交流を経て、学生一人一人とコラボレーションするにはどんなプログラムで挑むべきか繰り返し話し合い準備を進めた。

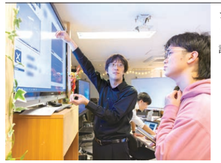
12/16

本番実施・振り返り

事前の交流を経てみえてきた関わり方

「彩能タイム」の前半に自己紹介を兼ねて、学生とコラボレーションして音をつくる「音楽つくりやさん」のデモンストレーションをし、予約表に名前を書いてもらった順番に一人一人と対話をしながら音づくりに励んだ。

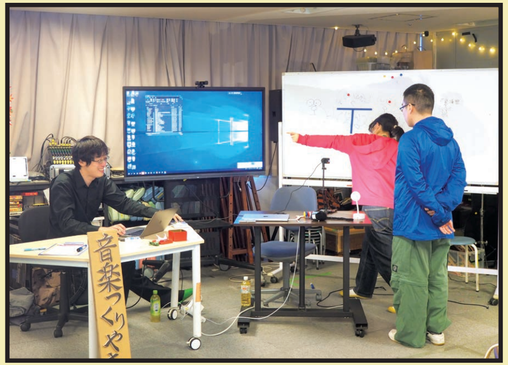
「音楽つくりやさん」の看板とそのエリア。設置されたカメラに写った画像がモニターに映し出され、その画像の黒い部分が音として鳴る仕組みになっている。



プログラミングした音づくりシステムについて学生に説明する田中。

活動を振り返って

頭に思い浮かんだモーツァルトの絵を描いて持ち込む学生（写真右）。



カメラの前で踊りその動きを音に変換する学生など、さまざまな学生とのコラボレーションが実現した。

学生たちは見たことのない音づくりシステムに興奮し、井川と田中も学生たちの独自の発想力に感心した様子だった。

メンバーコメント

井川 丹（アーティスト）

学園に初めて訪問した際、戸惑い気味な私たちに、その時々で近くにいた学生さんたちがこちらの立場に立った声掛けをしてくれたことが印象的でした。「今はこういう時間ですよ」「いきなり〇〇するのは難しいですよね」など、我々を学園の後輩のように受け入れてフラットに接してくださったのがとても嬉しく、お陰で居心地よく過ごせました。声をかけてくれた学生さんたちも、彼らの先輩に同じようにしてもらっていたのかなと想像しました。
翔和学園の『「人間の生きていく気力を育てる」ことを通じて社会性を伸ばす』というビジョンと、それを体現する先生方の熱量や創意工夫に、毎回非常に感銘を受けています。学内の掲示物や学生さんへの配布物、授業の内容。どこを切り取っても、そこに至るまでの膨大な時間と労力がぎちぎちにつまっていて、果たしてここに我々の入り込む余地があるのか、田中さんと途方に暮れたほどです。
更に驚くべきは、こういったカリキュラムが学生さんたち一人一人に寄り添った完全オーダーメイドであることです。その結果として、各々の活動が伸び伸びと展開され、バラエティに富んだ素晴らしい表現がたくさん生まれています。学園に訪問してそれを目撃する度、一表現者として、リスペクトの念と嫉妬を覚えました。

田中 文久（アーティスト）

プログラムのイメージが生まれたきっかけは、学生たちそれぞれが個人で取り組んでいるプロジェクトの中間発表の様子を見て衝撃をうけたのがきっかけでした。最初は自分たちの何らかのスキルを学生に提供するようなことをイメージしていましたが、学生たちそれぞれの活動が充実しているので、同じ「つくる人」としてリスペクトを感じました。そこに介入するよりは、自分たちも同じ空間で好きなことをやることの方が大事なのではないかと思いました。
そこにちょっとずつ関わってもらったりしながら、いろいろなパーツが集まって最終的に何かできるとか（できなくてもいいけれど）、学生たちとの関わりを積み重ねることによって何かができるような、そんな装置をつくろうと思いました。
今回実施してみて、全員の前で行うのは人によってはハードルが高いかもしれないので、ブースを設けるなどの工夫も今後必要かもしれません。個人的にはライブで学生に絵を描いてもらったりして、それを音楽にするようなコラボレーションもやってみたいです。

中村 朋彦（翔和学園 カスタマーサービス担当）

普段は他者との関わりを避けているある学生が、プログラムに参加し、かつ、そのことをポジティブに振り返っていたことが印象的でした。物事を損得で考える傾向の強い自閉スペクトラムの若者にとって、目に見える形で価値を生み出してもらえたことに意味があったのではないかと思います。「褒める」ということは彼らにとっては「得」とは感じられないのだろう、ということを痛感しました。
このプロジェクトを通じて、組織の内と外を隔てる境界が緩やかになっていくことや、本当はそんな境界はないはずのものを、あらためて、ない、と認識できる機会を得られたことが成果だと思います。

水川 勝利（翔和学園 教員）

アーティストの音楽生成プログラムと学生とのコラボレーションで学生にとって新しい気づきや発見がありました。今回の経験は、学生の日常のモノの見方に少なからず影響を与えたと思います。自身のイラストが音に変換され、またそのイラストを称賛され自己肯定感が向上した学生もいました。
アーティストや事務局の皆さんが学生一人一人を良く知り理解してくださっていて、その心の姿勢が、学生たちの心理的安全性を担保していたことに感銘を受けました。普段は癇癪を起しやすい学生もプログラムに熱中していて、あらためて相互理解とその姿勢が重要だという気づきを得ました。
目的や目標への過程、その探究、その軌跡、生じる関係性自体に価値を見出し大切にしているTURN LANDのプロジェクトは大変貴重な機会になっています。今後もより多くの学生がプロジェクトを体験して、彼らにそれまでとは違う視座や価値観を得たり、またアート思考などを体験する場になってほしいと思います。

浅沼 香南（翔和学園 教員）

普段、褒めてもらってもなかなか素直に受け止めてくれず、「今回もうまくいかなかった」とネガティブな結果として終わることが多い学生が、「私の絵が喜んでもらえたぞ！」と素直に他者評価を受け入れ、喜んでいる場面が印象的でした。自分の絵を生の声でその場で即座に褒めてもらえたことで、素直に嬉しいと思ったのだと思いました。即座のフィードバックと激励することは、あらためて大事だなと気づかされました。また、ただ褒めてもらっただけでなく、プロの手で音楽という形を通して新たな視点から自分の絵を見ることができたり、TURN LANDの人々とのお話を通して新しいアイデアがたくさん出できたりしたことで、学生の自己肯定感が上がることにつながったのだなと思いました。外部の方とつながりの輪を広げていくことが、学生の心を豊かにすることにつながるのだとあらためて感じました。
TURN LANDの皆様との関わりを通して、学生の自己表出の場が増えたことや、プロのアーティストとの関わりを通して、学生が自分のプロジェクトを新たな視点から見ることができたことが今年度の成果だと思います。
今後もTURN LANDプログラムの活動を通じて、自己表出が苦手な学生が、自分のプロジェクトについて自分で語る力を身につけてたり、自分の世界の中でしかプロジェクトをやっていない学生が、TURN LANDの人々との関わりを通して、視野を広げていってほしいです。

翔和学園 学生

カメラに映っている黒の部分が、音が出ることに驚いた。さらに黒の部分が、画面の上部に行けば行くほど、高音になることが面白かったです。「max」というソフトが存在していたことを知りました。世の中は、カメラに映ったものを使って、音楽がつくれることに感動しました。

松山 葵（翔和学園 学生）

音楽をつくるソフトをやっている人はネット上で見たことがありましたが、本物を見て少し興味がわいてきました。「音楽つくりやさん」が来たことで教室がにぎやかになりました。毎日やってほしいくらいです。これからこの時間がいろんな人のことを互いに知れる場になったらいいなと思います。

翔和学園 学生

私の絵が喜んでもらえたぞ！自信がもてた！4～5枚ぐらいのイラストを音にしてもらいました。浮世絵を音にすると、軽はずんでいるような音がしました。ロマンチックな感じ。エグゼクティブ、奇跡なのか、計画的だったのか、意外にいい感じで驚きました。もっと授業として真面目に受けたいです。「音楽つくりやさん」がテレビ教育番組になってほしいと思いました。

事務局コメント

翔和学園では学生一人一人が目標に向かってそれぞれに自己実現を目指している。そんな一人で抱く「夢」には選ばれなかった純粋な「イメージ」がアーティストたちと共鳴し新たな形として生まれてくる。それらは取るに足らないなんだかよく分からないものかもしれないが、よくみてみるとなんとも愛おしいもので、それが誰かに価値を見出されると予想以上に嬉しかったりする。そんな経験が自分の知らない自分を社会化する機会となり、無自覚な細かい根がたくさんはった幹のように精神を強くする可能性があるのではないだろうか。

学生が描いたモーツァルト。

このプロジェクトに関する詳しい情報はこちら

● 本プロジェクト紹介ページ

https://turn-land-program.com/case_post/31showagakuen_2024/

● 本プロジェクト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/project_case31showagakuen_2024/

プレLAND

はなまるホーム浅草北

あえてちょっと
緊張し合い
特別な時を過ごす。

プロジェクト名

はなまる社交界

参画施設・団体

はなまるホーム浅草北

生活リズムの制限はできるだけ設けず、入居者がお互いに支えながら、閑静な住宅街で心穏やかに生活しているグループホーム。台東区に位置し、入居者の日々の日常が彩り豊かなものになるよう、職員が散歩や買い物、地域行事への参加などをサポートしている。地域にひらかれたグループホームを目指している。

プロジェクトメンバー

島田 明日香（クラリネット奏者）
若山 萌恵（コーディネーター）
鈴木 裕也（はなまるホーム浅草北 施設長）
TURN LAND プログラム 事務局

アーティストプロフィール

島田 明日香
Asuka Shimada

東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。中国ユース音楽コンクール木管楽器の部1位受賞。在学中に藝大フィルハーモニア管弦楽団とモーニングコンサートで共演。第25回浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバル「オープニングコンサート」に参加。
TURNフェス4にクラリネットの演奏で参加、第7回TURNミーティングにてパフォーマンス演奏で参加。

左から施設長の鈴木、島田、若山。

プロジェクトのねらい

1 利用者たちにとって新鮮な経験になるような出来事をつくりたい。

2 演奏を聴いてもらうだけではなく、社交を楽しむ場をつくりたい。

施設の見学をした際、楽しそうにアーティストを案内したり、お茶を出したりする利用者の姿を見て、誰かを迎えたり少し外行きの顔をしたりする時間が活力を生むことに気づかされた。芸術のイメージが持つ「特別感」や「上等な気分」を上手に残したまま、「静かに聞かないといけない」「知らないと恥ずかしい」そんなマイナスな要素たちを削ぎ落とし、もっと人と人との自然な出会いの中に音楽がある状態を目指した。補聴器をつけた方がいい？外したほうがいい？どれくらいお洒落していく？どれくらいの長さなら楽しめる？どんな曲聴きたい？職員とアーティストが協力して一人一人の不安や期待を受け止めたことで、結果的に、思わず大きな声を出して泣いたり、利用者が突然大きな声で歌ってもその場が成立するような演奏会が実現した。その場に集った利用者や職員も、お酒や華やかな食器がなくても、レインボーカラーのリボンがあしらわれた手製の小道具で乾杯するだけで、「期待に応えている」「ちょっと素敵なことをしている」という自負が生まれていた。利用者たちは、勇気を出して新しいことに挑戦する表現者を拍手で歓迎し、その場を盛り上げる大事な役割を担っていた。

PROCESS

2024 6/7 顔合わせ | 9/24 | 10/2 | 19 交流 | 23 企画会議 | 11/6 | 27 | 2025 1/16 振り返り

9/24

顔合わせ・企画会議

施設の現状共有とプロジェクトの方向性を検討する

施設の見学をし、職員の話を聞いたり、利用者のおもてなしを受けながら施設の人々と関わるなかで、この場にどんな場が必要かを探った。

職員と施設での活動について話し合う。

利用者の部屋を見学させてもらい部屋に飾ってあるものや好きな時間について話す。

10/2 11/6

演奏と交流（1）（2）

プロジェクトのイメージを実践のなかで共有していく

どうしても最初は利用者に「施設に何をしに来たのか」を説明するために、「クラリネット演奏する人です」と紹介することは避けられない。ただ、「演奏する側」と「演奏を聴く側」という関係を超えるにはどうすればいいだろうか。たくさんの課題が見えた日となった。

職員がつくった華やかなポスターにサインをする島田。

2回目の演奏会。施設の活動（フラダンス）とコラボレーションする場面もあった。

11/27

演奏と交流（3）

利用者と職員と共にオリジナルの場をつくる

事前に利用者一人一人に好きな曲を教えてもらい、演目の中に散りばめた。補聴器があった方がいいか外した方がいいかの調節が最初に入ることや、大きな声で歌いたい人がいること、思い出の曲の時には声をあげて号泣したい人もいること、静かに聴かなければいけないのではなく、気軽な会話の延長線上に演奏があるような、「社交界」を実現した。

利用者に話しかける島田。

蝶ネクタイをして司会を務めた施設長。

活動を振り返って

3回目の演奏会の様子。ジャズナンバーの時にはカーテンを閉めてカラフルな照明でムードを演出。

話しかけたら声が届く距離での演奏は、クラリネットの演奏に被せて誰かが歌ってもちゃんと声が聞こえるので、利用者も場を盛り上げる一員になれるのが印象的だった。コンサートホールともホームパーティーとも異なる新しい「社交界」となっていた。

メンバーコメント

島田 明日香（アーティスト）

心の底から感動している人々の顔を見て、喝采を浴びて嬉しかったです。ノリノリのジャズが大好きな方もいて、お年寄りはゆっくりな曲が好き！という先入観から抜け出させてくれました。また、歌詞を全部覚えている方もいて、認知症の方もかなりの記憶と共に生きていらっしゃることを実感できました。コンサートホールではシンフォニックな大きな音が喜ばれますが、施設には補聴器をつけている方もいるので、音量が大事だという気づきもありました。このプロジェクトを通じて、何度も挑戦するチャンスを得られたことで次回はより良くしよう！という経験を短期間でできました。
職員や事務局の方に凄く支えられて、出演者は自分だけではない！と本当に強く感じられました。皆さんと協力し合い、感動のためにひと時を過ごすことで深い理解が芽生えたことが重要な変化だったと思います。ご家族や大切な方も一緒に時間を過ごし、利用者の方がどのようなことに関心・感動があるのかを知り、一緒に体験できるような場になっていったらと思います。

松岡 美弥子（作編曲家、ピアノ・キーボード奏者）

多くの方が音楽を口ずさんでくれました。終演後に、演奏した音楽をきっかけとして利用者さんどうしで語り合う姿が見られたのが印象的でした。リクエスト曲を演奏した際、イントロを弾き始めた瞬間に涙ながらに感動してくれた利用者さんがいました。リクエスト曲の中には島田さんも私も初めて挑戦する曲や、市販の楽譜が見つからず楽譜を起こした曲もありましたが、喜んでいただけて嬉しかったです。
利用者の皆さんが島田さんを見つめる温かい眼差しと、利用者一人一人に語りかけるような演奏・MCによりつくり出された温かい空間が今回の成果だと思います。このプロジェクトで、日常のルーティンとは少し離れて定期的にアーティストの表現に触れていただく体験が日常の中に面白さを発見するきっかけとなり、日々に笑顔が増えれば良いと思います。

鈴木 裕也（はなまるホーム浅草北 施設長）

最後の演奏会では島田さんがマスコットキャラクターの被りものをしたのが印象的でした。こんなことまでしてもらえるんだと正直驚きました。自身も島田さんの社交界というテーマの中で提案された、蝶ネクタイを着けましたが、利用者さんがすぐに気づき、とても反応がよかったです。昔感動した映画を今観るとイメージが違ったりして感動しなかったりしますが、音楽は昔の記憶のイメージが蘇って感動につながると思いました。認知症と診断されて入居している利用者さんは、普段外部の接点がないので、とても良い機会になったと思います。また頼られたりすると喜んだりしますので、次の機会には利用者が何かを提供することも大事なことだと思います。

仲澤 鈴子（はなまるホーム浅草北 職員）

自分のリクエスト曲を演奏してもらえる機会は初めてだったと思うので、すごく喜ばれていたと思います。職員がつくった島田さんの演奏のポスターが貼られると、利用者さんから「いつなの？」とか、ポスターと一緒に写真を撮られている利用者さんもいました。演奏中は、普段見れない利用者の表情が見れました。演奏の動画を振り返っていたら、撮っている職員が歌っていたので、職員にリクエスト曲を聞くのも良いかもしれません。演奏を聴いて涙を流す利用者を見ると、音楽のちからで一瞬で記憶が蘇っているのがよく分かりました。

佐藤 ミカ（はなまるホーム浅草北 利用者）

演奏を聴いて母親を思い出した曲もありました。（上京したときの曲）
演奏を聴いていると気持ちがウキウキしました。何回聴いても飽きないし、楽しみました。
今度は、演奏に合わせて歌ってみたいし、歌の練習もしたいです。

事務局コメント

「音楽」という抽象的な時間に包まれて、利用者の身体が抱えていた「どうあがこうがどうにもならないもの」や、人生を彩った思い出が時間が経つにつれコアな感情だけが残り、化石化した部分が、大きな嗚咽と共に涙になって流れてゆくのをみた気がした。演奏する人も演奏を聴く人も、互いに表現しあっているのがとても新鮮で興味深かった。
施設内であっても、グループホームという社会の中で、普段ははみ出さないように心がけている部分の敷居が下がり、いつもよりちょっと自由に居ていい時間がつくれていたようにおもう。せっかくだからオシャレもしたいし、澄まして音楽に酔いしれたいし、乙女な顔して笑ってみたりする。そんな気分をいつものリビングで実現する贅沢。そんな気分の良さが利用者同士の交流を促していたのが印象的だった。

レインボーカラーのリボンで飾った割れないグラスたち。

このプロジェクトに関する詳しい情報はこちら

● 本プロジェクト紹介ページ

https://turn-land-program.com/case_post/32hanamaruhomeasakusakita_2024/

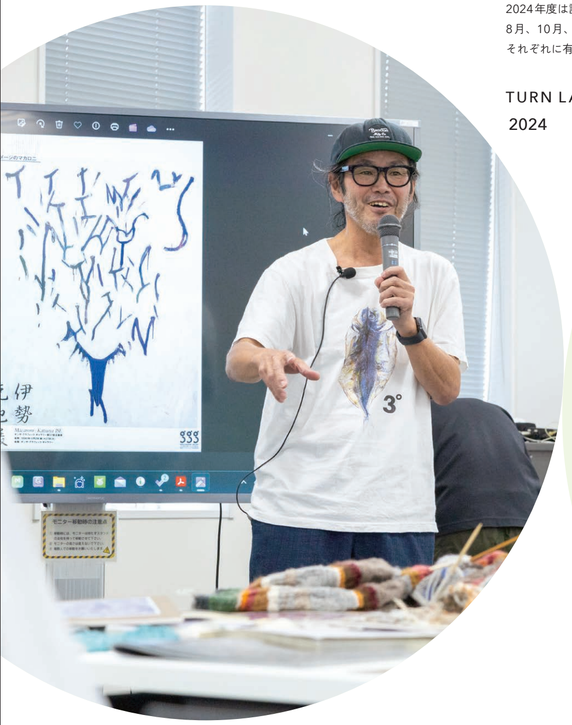
● 本プロジェクト紹介動画

https://turn-land-program.com/archives_post/project_case32hanamaruhomeasakusakita_2024/

アーツカウンシル東京の森司がTURN事業の歩みについて話した時の様子。

TURN LANDミーティング

TURN LANDミーティングは、本事業に参加している福祉職員やアーティストが一堂に集い、ネットワークを醸成する場です。ほかの施設はどのような取組をしているのか、気になっていてもなかなか足を運び見学することは時間的に難しいので、その場で情報共有をしたり共にレクチャーを聞いたりすることで仲間がいることを実感し、学び合うことができます。本事業は多くの人にとってはじめての試みなので、「こんなに大変なことをほかの施設はどうやっているんだろう？」「共創するって、ほかのアーティストはどのような手法をもっているんだろう？」そういった問いを持ち寄り集うことで、答えが一つではないことを知り、正解が分からなくても実践しながら考えていくことの重要性を実感し合う場があることがとても励みになります。また、プロジェクトごとのメンバーが意見を交わすことはもちろんですが、東京都やアーツカウンシル東京の職員と福祉職員やアーティストが直接話せる場でもあります。



アーティストの伊勢克也が自身の芸術活動について説明する様子。

2024年度は計３回開催しました。
8月、10月、1月と開催時期に応じて異なる内容とし、
それぞれに有意義な気づきを得ることができました。

TURN LANDミーティング 2024

01st

第１回

「TURN LANDの可能性について考える①
—マカロニ的存在についての哲学対話—」

日 時：2024年8月6日（火）15時～17時
場 所：アーツカウンシル東京　5階大会議室北中

内 容：
アーティストの伊勢克也が40年間探求し続けている「マカロニ」の視点から、TURN LANDプログラムの可能性についてディスカッションする。

パネリスト：
伊勢 克也（アーティスト）
森 司（アーツカウンシル東京）

ゲスト：
梶谷 真司（東京大学）

進 行：
富塚 絵美（TURN LANDプログラム事務局）

第1回の開催は、参画する施設やアーティストが決まり各事業が動き出す8月とし、キックオフイベントとして実施しました。

はじめに事務局から今年度参画する人々の紹介と現状共有をし、次にTURN LANDプログラムのはじまりや、TURN事業の展開についてアーツカウンシル東京の森司より説明がありました。アーティストの伊勢克也は、事業の企画会議では話しきれない活動の背景や自身の抱えるテーマについて話しました。そしてその後、梶谷真司がファシリテーションして哲学対話をみんなで経験し、最後に東京都やアーツカウンシル東京の担当者も交えて自由に対話する機会を持ちました。

この会では参加者の名前や肩書き・所属などを書いて貼ったりせずに、中央に大きな机を置き、その上に伊勢の作品や資料を並べました。また、今までは東京都やアーツカウンシル東京のメンバーの席を別に用意していましたが、ここに集う人々がそれぞれに連携・協働していく仲間として対等に対話に参加した方がいいという梶谷の提案を受け、椅子の配置もあえて整いすぎないように並べ、参加者が座りたい場所を選べるようにし、位置も自分で気軽に調節できるようにしました。

参加者からは「この事業の取組の背景にあるアーティストの活動動機などがじっくり聞けてアーティストという存在にとても興味が湧いた」「TURNでの伊勢さんの取組が以前より奥行きをもって理解でき実際に現場を見てみたいと思った」などの声がありました。また、福祉職員の中には、これを機にアーティストとの顔合わせや企画会議の前に、アーティストについて積極的に調べる人も現れ、今年度の活動の方向性についてアーティストと意見を交わす際の共通言語が増えたようでした。

机の上に並べられた作品を手に交流する。

事務局の富塚絵美が各施設の今後の活動について紹介する。

アーツカウンシル東京の渡邊部長によるコメント。

福祉職員が質問する様子。

梶谷真司が会場から問いを集め対話を促す。

休憩時間などの合間の時間も熱心に資料を閲覧する参加者。

アーティスト同士で交流する貴重な機会となっている。

アーツカウンシル東京のメンバーに挨拶する参加者。

自身の活動について説明するアーティストのきむらとしろうじんじん。

TURN LANDミーティング
2024

02nd

第2回

「TURN LANDの可能性について考える②
—じんじんの取組を事例に—」

日 時：2024年10月16日（水）14時30分～17時
場 所：SCC千駄ヶ谷コミュニティセンター
　　地下1階 サークルホール

内 容：
お抹茶陶芸屋台「野点」と旧小学校を拠点としたアートプロジェクト「作業場」の実践経験から、TURN LANDプログラムの可能性についてディスカッションする。

パネリスト：
きむらとしろうじんじん

ゲスト：
松尾 真由子・高岩 みのり（ちょちょまうヴァナキュラー実行委員会・事務局／一般社団法人brk collective）

進 行：
富塚 絵美（TURN LANDプログラム事務局）

第2回の開催は、各プロジェクトが動き出して具体的な課題が見えてくる10月とし、街なかでアートを20年以上継続実施しているベテラン勢を招きました。

はじめに事務局から今年度実施している10のプロジェクトについて進行状況を共有し、ゲストの人々の紹介へと移り、本事業に参加しているアーティストのじんじんと、地域に根差したアートプロジェクトの実践を重ねているゲストの松尾と高岩が、西成地域で実施してきた「作業場 @旧今宮小学校」とその背景についてお話を伺いました。

この会では正面に資料写真などを映しながら、参加者たちが気になることをじんじんやゲストの二人に直接投げかけるスタイルでの進行となりました。参加者たちは配布された資料を手に、それぞれが実施しているTURN LANDプログラムのプロセスを頭の中で重ね合わせながら、「こういったことなら私たちの地域でもできるかもしれない」「こんな場がうちの近くにあったらいいのになぁ」など自由に思考を巡らせました。配布資料の中にはプログラムのチラシや開催地のマップなどのほかに、実際にじんじんがプロジェクトで使用している手書きのレジュメなどもあり、丁寧に挨拶回りや地域の人々との出来事を紡ぎながらやりたいイメージを社会の中で実装していくたくましさときめ細やかな配慮に、たくさんの学びとインスピレーションを受け、前のめりになりながらメモをとり学ぶ参加者の姿が印象的でした。

「野点をやっている時ってどんな気分ですか？」など忙しい現場では聞けないようなアーティストに対する素朴な質問が飛び出したり、「プログラムを地域の人や協力者に説明する時にはどのような工夫がありますか？」「TURN LANDプログラムについてどう思われますか？」などといった経験値のあるゲストから現場に活きる考え方を積極的に引き出し取り入れようとする姿勢が見受けられました。

プロジェクトの背景や変化について話すゲストの松尾真由子。

自身のプロジェクトと重ね合わせて、積極的に質問をする参加アーティスト。

地域を巻き込んだプロジェクトについて、興味深く話を聞く福祉職員。

スクリーンにはじんじんの活動の様子が写し出された。

「作業場」の活動について紹介するゲストの高岩みのり。

1回目のTURN LANDミーティングよりも具体的な質問があがった。

プロジェクトの運営方法について詳しく知ろうとする福祉職員。

20年以上継続しているプロジェクトの事例を前に、継続実施することの意義を学ぶ参加者たち。

自分たちのプロジェクトに活かせるアイデアをメモして持ち帰った。

「わがままポスト」にわがままを投函し、青木亨平が制作したポストの音声を聞く参加者。

TURN LANDミーティング
2024

03rd

第3回

「TURN LANDの可能性について考える③ ―今年度を振り返えって―」

日 時：2025年1月22日（水）14時30分～17時
場 所：アーツカウンシル東京 8階会議室

内 容：
プロジェクトの振り返りをピアレビュー（フェイトとラ・マノ、だんだんと浅草みらいど）で行った後、だんだんのプロジェクトで制作した「わがままポスト」を用いて参加者全員が今後の展望を語る。

各プロジェクトの活動について記録動画でイメージ共有をした。

第3回の開催は、全プロジェクトの振り返りが終わった後の1月とし、互いに評価し合うピアレビューの手法で行いました。

まずはじめに今年度の各プロジェクトの様子を伝える動画を見てもらい、その後4つのプロジェクトを選び、2つずつに分けてピアレビューを行いました。会場にはだんだんのチームが制作した「わがまま」を集めるためのさまざまな道具が運び込まれ、みんなで紙芝居形式のパフォーマンスをみたり実際に「わがまま」をそれぞれが記入しポストに投函しました。

参加者たちは、最初に記録動画を見たことでほかのチームが行ったプログラムについて具体的にイメージができ、関心も深まっている様子でした。また、TURN LANDミーティングも3回目ということもあって親睦も深まったのか、プロジェクトを超えてコミュニケーションを取る様子が印象的でした。

ピアレビューでは、「場のつくりかたの工夫」や「場をひらくことで見えてきたこと」をテーマに、ペアになったプロジェクトの職員やアーティストが共に気づきを共有しました。

最後は、今年度のみならず3年間に渡る実践を振り返ったコメントや、事務局メンバーとの連携についての話に広がるなど、プロジェクト運営に関して多角的な視点で意見交換ができました。議論するテーマも、どのプロジェクトにも通じる普遍的な問いが議題に上がるなど、この場を繰り返し開いてきたことの成果を同時に感じることができた場となりました。最後にアーツカウンシル東京の森がアーティストたちからのエールを受け止め謝辞を述べると、感動的な空気に包まれ、時間をかけて「ピア（仲間）」を築いてきた喜びを実感した日となりました。

紙芝居形式のパフォーマンスをする藤田龍平とそれを楽しむ参加者。

これまでに制作した「わがまま」を集めるためのさまざまな道具を会場に展示した。

参加者全員が「わがまま」を記入した。

ほかのプロジェクトの記録資料を興味深く読み込む福祉職員。

ほかのアーティストたちのプログラムを体験できる特別な機会となった。

中間支援組織としての事務局の功績について力説する参加者たち。

利用者とのコミュニケーションや工夫した点について話す参加アーティスト。

ほかのプロジェクトの取組を高く評価し、プロジェクトメンバーにエールを送る参加アーティスト。

参加アーティストや福祉職員に声をかけるアーツカウンシル東京の職員の森。

日常に波及する
文化的な時間を目指して

社会的「障害」が生じるということが、どういうことだかイメージできるだろうか。

「障害者」と括られる人々の多くは、それぞれ何らかの理由によって、文化施設に行くことができない。文化施設での振る舞いをイメージすると、音楽のコンサートで突然大きな声を発する可能性があるとか、展示室でその場のものを壊す危険があるとか、そういったことを思い浮かべる人もいるだろう。しかし、それ以前に、決まった時間・場所に必ず行く、という約束をすることにハードルがある。そして、何かあった時にスムーズにコミュニケーションが取れないかもしれない。何かを伝えても、伝わらないかもしれない。伝わっても、返してほしいようなタイミングで何かが返ってこないかもしれない。当然だが、福祉施設でアートのプロジェクトを行うということは、多かれ少なかれ「上手くはいかないかもしれない」というのが何をするにも前提となる。本事業は、そんな状況の中で、少しずつ、手探りで進められている。でも、だからこそそれぞれに「やれることをやってみる」「その場その場で助け合う」ことが前提で、創造的であることに躊躇がない。そういった時間では、能力や責任を問うような思考よりも、一人一人の気分やタイミング、動機や意向が問題になる。それらは「社会的な時間」の中ではなかなか重要視することが難しいが、「文化的な時間」の中ではそれらがリズムやテンポをつくりその積み重ねがプロジェクトを温めていく。福祉施設という環境は、社会生活が知らぬ間に見落としてしまった宝の種を育てるのにもってこいの場所なのかもしれない。どう育てるか分からないその種を、多様な人が集まって知恵を出し合い、どうにか花を咲かせようとする。この事業が提供するのは「物の作品」ではなく、そういった「場」であり「状況」である。物として残るのはコミュニケーションを誘発する「小道具」や「舞台」だ。その「小道具」や「舞台」が福祉施設に残るとその使い方を知っている職員や利用者たちによってそれが日常的なツールとなることはこの事業の理想的な成果の一つかもしれない。それらは「破壊と創造」の経験をたくさんしているアーティストと障害特性や医療の限界を知る福祉職員が力を合わせ、さらに利用者と一緒に検証を繰り返した言わばその施設のためにつくられたオートクチュールの作品である。実施・検証のプロセスを共有していることで、その制作意図だけでなく、細部の機能性を理解した者が施設や地域に残ることになる。また、それ自体が日常で使われることがなくても、その創造的なプロセスを共にした経験はほかでは得難い貴重な体験であり、レジリエンスを高めるさまざまな気づきを得ることは間違いない。本事業ではアーティストはその場の演出を考え芸術監督をし、その場に応じて時には「演じ手」となる。福祉職員は主に施設との調整役であるが、時に演じ手にもなる。さらに面白いことにアートの場では普段の障害が障害で無くなることがあるので、福祉職員よりも利用者の方が得意な場合は職員が支援される側になったり、アーティストが利用者に励まされる場面も多々発生している。「合理的に配慮する」ための対話力や多様性への理解を頭だけで理解するのではなく、協働することで経験を通じて「尊重し合い励まし合う共創力」を体得する大事な機会となるだろう。

主催　東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人 谷中のおかって

TURN LAND プログラム 2024 活動記録

2025（令和7）年 3月28日

企画・制作・編集　一般社団法人 谷中のおかって
写真　梅田 彩華、TURN LAND プログラム関係者
デザイン　SHIMA ART&DESIGN STUDIO
印刷　株式会社 加藤文明社

発行　アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団 ）

〒102-0073
東京都千代田区九段北4丁目1-28
九段ファーストプレイス5階
TEL 03-6256-8435　FAX 03-6256-8829
https://www.artscouncil-tokyo.jp

※営利・非営利を問わず、当資料のコンテンツを許可なく複製、転用、販売など二次的利用することを禁じます。